女子の教育

第一章　緒言

女子の教育は近來著しく發達して、初等中等の女學校は云うまでもなく、各種高等專門の學校も、漸次其數を加へて之れを十數年前に比ぶれば、全く面目を改めて居るのである。しかしながら、一面より觀察すれば社會の女子の地位に對し其教育に對する思想も、女子自身の思想も、久しき因襲に支配せられて、未だ當今の時勢に適當なる位地に進まず、女子自身の爲め、家庭の爲め、國家社會の爲めに、尙ほ大に發展するところがなければならぬと思ふのである。

今日文明の先進國と云はれて居る、歐米の諸國にありても、一般の教育が、一種の形式的思想に束縛せられて、傳來の典型に篏まれば足れりとして居つた時代もあつた、卽ち教育は專ら當時の宗教の經典を學び、其信條を研究することを主として、傍ら數學、文典等の知識を授けて、人間天賦の性能を各方面から啓發すると云ふやうなことは、全く顧みなかつたのである。然るに人間の性能を完全に發達させやうとするには、さやうに簡單な、又一定したる鑄型に入れるやうな形式的教育では、到底其目的を達することは出來ないのみならず、却て生來の性格を萎縮させるやうな結果に陷るのであつて、社會の進步に伴ふて、漸次教育の方法に不滿を懷く者が多くなつて來たのである、中にもペスタロツヂとか、フレーベルと云ふやうな人々が現はれて教育の改革を企て、色々の變革を經て遂に今日の教育法が組織せられたのである。而して女子の教育も、亦種々なる變革を生じて、或は女子は唯だ家庭に在りて、臺所や子供の世話をすれば、基本分を全ふするに十分であつて、殊更學問をなし知識を發達させるには及ばない、女子の教育は無用であると云ふやうな說を唱へ、或は女子の位地が未だ教育を受けるまでに達しないと云ふ尙早論を主張する

等、反對の議論は頗る囂しかつたのであるが、しかしながら世界進歩の大勢には、何物も抵抗することは出來ないのであつて、現に獨逸の如き、女子教育に對しては、保守的傾向ある國ですら、今日では女子の爲めに大學の門戸を開き、男子と同じく其教育を受けることを許して居る。米國に於て有名なるメリーライオンが、一身を捧げて、女子教育の發達を企て、マウントホリヨーク女學校を創立した頃は、一般社會より少なからざる反對を蒙つたのであつたけれども、今日にては多くの女子大學の設立を見るに至り、他の多くの大學も女子の入學を拒まないのであつて、女子教育の旺盛なること、世界に其比を見ないやうな狀況を現はして居る、從つて女子は漸次に其位地を進め、其性格を進めて、最早國の勢力は女子を除外しては計量することは出來ない、國運の發展は女子の力に俟たねばならぬ狀態になつて居る。是れ實に宇内の大勢の然らしむるところで、女子の使命は家庭に主婦として子女の教養者として、男子の扶助者同勞者として大なる職責を有すると共に國民として、人類の一人として、方面こそ異なれ、盡すべき職分は多く、女子が能く其職分を盡すことによりて、國運の進歩に貢獻することの多大なることを實驗し、女子自身も其智能を啓發し、德性を涵養することに努力するのみならず、社會一般に之れを奬勵し、之れを扶掖するに至つたのである。

歐米の諸國と我國とは、素より國情を異にし、歴史を異にして居るので、歐米の風習を直ちに移植することは出來ないのであるけれども、開國進取を國是と定め列國と列んで、世界の大舞臺に立つた以上は、其形勢を察し其趨向を考へ、之れに順應して行かなければ、國運の發展は望まれないのである、現に之れが爲に、政治、實業、財政、外交等社會の各方面に非常なる變革を遂げ、宇内の大勢に後れを取らじと努め勵んで居るのである、從つて女子の職分も、此形勢の推移に伴ひ、盡すべき方面は勢ひ擴張せられ、女子自身の性格をも高めねばならぬ必要を生じて、其教育も漸く發達を促がして來たのである。而して此際女子をして適當なる位地に進ましめ、世界の進運に後れを取らな

いやうにするには、女子教育が一層適切なる方針に由つて發達せられねばならぬ、卽ち女子をして自己の本性を自覺し、其可能性を認め人として天賦の諸能を發達し、女子特有の優雅なる淑德性格を發揮して自己の位地を高め、家庭の必要に應じ、國家の現在及び將來の必要に應ずべき智識、實力、品性を養成すべき方針を採らねばならぬのである、此要求を充たすべき最も適切なる教育は、第一に科學的教育、第二に國家的經濟的教育、第三に道德的教育、此三の要素を有するところの教育が殊に必要なるを信ずるのである。

卽ち家庭に在りて主婦の任務を全ふするにも、從來の遺風を守るばかりでは足らないのである、子女を教育することも、臺所の仕事も、科學的智識の一斑を學ばねばならぬ、食物の調理にも、洗濯をするにも、在來の方法では不可能なる新らしき物が出來て居る、況して其子女を導きて將來の社會に立たせるには、父祖より相續したものを保守するばかりでは、日新の社會に立つことは出來ない、現代の社會を知り、將來の趨勢を察して、之れに順應する性格を備へて居らねばならぬ。更に妻として男子の同勞者として働くべき社會の形勢は如何樣であるか、國民として働くべき國家の形勢は如何樣であるかと云ふに、武士の階級によりて國政を維持して居つた時代は遠く過ぎ去つて、上下男女の別なく同じく國家の發展の爲に盡さねばならぬ時代である。而して國としては世界の列國と共に國際的商工業の競爭に加はらなければならぬ時代となり、國民の實力は經濟的活動に現はれねばならぬのである、國の運命を拓かんとするには、是非とも商工業の競爭に優勝の位地を占めなければならぬ。今日の商工業の競爭に缺くべからざる準備は、科學的智識と經濟的品性である、商工業の基礎となるものは、實に科學應用の力である、經濟的國民活動の原動力は經濟的品性である、由來經濟と品性とは、何れの國にても甚だ矛盾して居るものとせられた時代があつたので、經濟とか、利益とか云ふことは、道を修め德を養ふほどの者の口にすることすら耻として居つたのである、況して女子と經濟との關係は、殆んど緣の無きものであつたのである、然るに前に云へる如く、我國の將來の國運は經濟力の

增進によりて發展の途を求めねばならぬ時となり、國民が國家社會に盡すべき精神も之れに應じて變遷を來たし、教育の方針も亦た之れに則らねばならぬのである、換言すれば、我々が力を盡し、智識を盡し、精神を盡して働くべき方面が、世界の進歩に伴ふて推移しつゝあるを認めて、之れに適應するにあらざれば、教育の效果を奏することが出來ないのである。

我々は此時代の推移を認め之れに順應すべき最も適切なる方法として、科學的教育、國家的經濟的教育、道德的教育の三綱領を立て、嬰兒時代、幼年時代より初等、中等、高等の教育及び卒業後の生活に至るまで、一貫したる精神により教育の方法を講究して見たいと思ふのである。

第二章　嬰兒時代

第一節　身體の發育

嬰兒時代とは、生れてから凡そ三年に至るまでの間を云ふので、心身共に非常に發達の速やかなる時代である。

凡て人類以下の動物にあつては、其最も進歩したる哺乳動物に於ても、兒童期卽ち子が發育して親と同一なる狀態に達するまでの時期は、極めて短かく、劣等の動物には殆んど全く兒童と云ふものがないのもある。犬の如き、猿の如き高等動物でも僅かな日月の間に、直ちに親と同じ獨立の生活を營なむことが出來るやうになるので、別に教育と云ふことをせずしても、自然の本能のまゝで一定の時期が來れば完全なる發達を遂ぐるのである、人間の子供は決してさうはいかぬ、其心身が完全に發達して成人となるには少なからざる年月を要するのである。兒童研究といふ科學

的研究から見る時は、多くの學者は、凡そ二十五年までを兒童研究の範圍として居る、つまり其頃までは、身體も精神も色々に變化し發達してゆくので、之を可型性と云ふのである、しかし人間の可型性は、假令身體の發達は一定の極處に達して成熟するも精神の發達は生涯を通じて休むことのないのは、教育上看過すべからざる事である。

此長年月を費やして始めて成人の域に達すると云ふことは、卽ち人間が他の動物に勝れて自然界の最高地位を占めて居る所以であつて、從つて此長き準備の時期に當つて、教育と云ふことが必要になつてくるのである。然らば此兒童期の最初であるところの嬰兒時代の教育は、最も父母の意を用ゐて丹精せねばならぬ大切な事である、素より此時代は、凡てに於て、唯本能の働きより外はないのであるが、尊き人間の生命の萠芽はこゝに宿つて居るのであれば、其心身發達の狀態を辨へて之れに適應する教養の方法を盡さねばならぬのである、先づ身體發育の順序から述べて見よう。嬰兒が母の胎內から生れ出でたる始めに當ては、概ね三千瓦（八百目）內外の體量と、五十仙迷（一尺五寸）內外の身長を有つて居る、生後一週日の間は之れを初生兒と稱へて今まで母の胎內にて臍帶から營養せられて居つたものが、始めて此世の空氣に觸れて、獨立して口から乳汁を吸ひ、身體諸機關の働きをなすに至るので、嬰兒にとつては驚くべき一大變化に遭遇したのである。故に外圍の溫度を始め、凡て急激の變化を避けて安靜を保たしむることが、最も注意すべきことである、それより滿一ケ年に亙りて乳兒期の間は、母の乳汁によつて生育し、身長體量共に著しく增大して來るので恐らく人間が生れてより一ケ年間に成長する比較をとつたならば、此時期程發達の速かなるはないのである、體量は六ケ月目に一倍となり、一ケ年の終りには更らに一倍の增加を見るのである。其他の諸機關も漸次發達して一ケ年の終りに及べば、乳齒徐々に發生して所謂離乳の時期が到來するのである、今まで流動營養物をのみ攝取して居つたものが、此時より固形營養物を消化することを得るやうに消化系統の發展を來たすのである、從つて身體精神の上に著しき變化を見るの時期であれば、食物の選擇は勿論疾病其他外界の刺戟に留意せねばならぬ

のである。

此後滿三年に至るまでは、身體內部の諸機關殊に消化系統の發達が迅速にして、骨格も筋肉も自由の運動に堪へるやうになり、神經系統の中樞發展も著しく現はれて來るのである、之れに反して體量身長は前一ケ年に比しては、其發達漸々遲々となり、三ケ年の終りには滿一ケ年の倍數となるのが普通である。

されば此變化の著大なる嬰兒時代に當りては、深く其變化の原則を辨まへ、最も適當なる方法をとることが大切である、卽ち營養、睡眠、運動、疾病等に注意して其自然の發達を妨げず、外界の刺戟に對する保護を與へねばならぬ、而して此身體の發達は精神上の發達と密接なる關係を有して居るがゆへに、絕へず其動作に氣をつけねばならぬ、今少しく嬰兒五官々能の發達を考察して見れば。

嬰兒の生後第一に注意すべきは視覺である、生後一二週間を經れば既に明暗に反應する動作を生じ、一ケ年を經れば其範圍漸々に廣まりて色彩に對する感興も覺へて來るのである。此時代の嬰兒の好む色は先づ赤とか黃とかの原色であつて、試みに二歲半位の嬰兒に、淡紅色のリボンを見せて其色を問へば赤と答へ、水色を示せば白と答ふるが如く、未だ淡雅なる間色の美を解し得ないのである、此事實は一面に於て人類が野蠻時代に於ける色彩感覺を現はして居るので、今日も尙未開人の如きは、嬰兒と異ならざる好尙を有して居るのである、又形に於ても角よりは圓形を好み稍美醜の區別を解するに至りては、無色のものよりは色彩あるものを好み、鬚髯多き男子の顏などは餘り好まないのである。

聽覺は極めて複雜なる機關にして、生後外界の刺戟に應じ得らるゝだけに內部が發達して始めて生ずるものである。然るに生れて間もなき嬰兒が、音響に眠りを覺まさるゝ如く見ゆることあるは、實は音を聽くのではない嬰兒の皮膚は非常に薄弱なるが爲め、皮膚全體に其響を感ずるのであつて、聽覺の發達と云ふことは出來ぬ、しかし漸次に

機關が調つて來るに從ひ、始めは單に音を聞き分くるのみであるが、やがて調音を解するやうになり、唱歌或は小鳥の啼く音などを喜ぶに至るのである、滿三ケ年の終り頃には、おほよそに調音を記憶して、若し大人が調節を誤まつて唱ふことあれば之れを聞きて笑ふことすらあるのである。

觸覺は比較的簡單であつて、母の胎内に居る時既に多少の反應がある、生後間もなく音響に感ずるのも此觸覺である。これが漸々發達して滿一ケ年以上に達する時は、冷溫の差は勿論滑粗の別をも知るやうになり、概して滑かなる物を好むも海月（くらげ）の如き心地惡しき物に觸るゝを恐るゝのである、其他指頭の感覺鋭くなるに從ひ、目を閉ぢて之れに觸るゝも、尙能く其物體を辨ずることを得るに至るのである。

味覺は出生の瞬間乳汁を口にする時既に其表出を見るのであるが、生後一ケ年の哺乳時代には、尙ほ單純なる表出に過ぎないのである、物の味ひを辨別することを得るのは、遙かに後のことで完全に五味を區別するのは二ケ年を過ぎての後である、此時代には多く甘味を喜こび、辛味、酸味の類を厭ふものである。

嗅覺は其始め極めて單純にして、特に注意を惹く如き表出はない、滿二ケ年の後に至りて、自から臭氣を厭ひ芳香を喜ぶやうになつて來るのである、しかし何處とも知らぬ梅花の暗香の如きは、まだ感ずることが少ないやうである。

筋肉の感覺は既に母の胎内に於て多少の表出を見るのである、例へば母體が冷氣に觸るゝ場合に、胎兒の動くを感ずることあるは多くの母の經驗である、生後はそれが著しく發達して、母親に抱かれながら其指を強く握り、或は膝を蹴る等は何人も熟知せることである、滿二ケ年以後に至れば身體の發育に伴ふて、其活動は一層烈しく、周圍の事物に對して抵抗する自發運動に興味をもち、玩具を與ふれば之れを破壞し、或は手に持てる物は幾度となく放擲して喜ぶのである。

痛苦の感覺も初生當時より明かに表はれて居る、嬰兒が自己生存の爲めに苦痛を訴へることは非常に發達して居るのである。

第二節　精神の訓育

要するに嬰兒五官の發達は何れも幼稚にして、且つ外界の刺激に對する反應作用も尙は甚だ不完全ではあるが、之れが後來精神活動を營み得る初步であつて、是に依りて自我の存在及び意識的表出の基礎をなすのである、されば五官の發達によりて現はるゝところの精神狀態は精細に之れを觀察して、適切なる訓育の鎖鑰を得ねばならぬ、今之れを智情意の三方面に分つて觀察して見たいと思ふのである。

嬰兒時代に於ては其重なる運動作用が全く感覺に存するので、それ以上の智的活動は十分でないのみならず、殊に感覺機關が活動を始めて未だ幾何も經ない初期に於ては、感覺に基く外界の認識卽ち直感の如き働きは殆んど皆無である、しかし滿二ケ年以上になれば、神經の末梢機關が稍完成されて漸々に確實に活動して來るやうになる、最初は色彩、音響の區別も出來ず、言語の如きも單に「バー、バー」とか、「ウマ、ウマ」とか云ふやうな喃語の外は發し得なかつたものも、二ケ年の後に至れば明かに其區別をなし、又日常見聞する事物に對して、相當の言語を用ゐて其意志を發表することを得るに至るのである。しかも此時代の言語は凡て疑問と要求で滿ち、何物に接するも之れを知らんと欲して已まない求知心の發作である、到來の菓子折などを頻りに見んことを欲し、障子に穴を穿ちて之れを窺ふが如きは、皆此動機に外ならぬので、是れ嬰兒が一面には自己の生存を全ふし、一面には智識的欲望の本能に導かれて、益々外界を支配せんとする先天的傾向であつて、實に人類として尊ぶべき智識の根本であると云ふことを看過してはならぬ。又此時代には模倣性が盛んになり、何事に拘はらず善惡難易の差別なく、殆んど無意識に他人の行動

を眞似るのである、これは嬰兒にとりては非常に愉快のことであつて、之れによりて益々其智識を廣めてゆくのである。故に此時代の智的訓育に缺くべからざるは、第一に智識上最大の關門たる視覺及び聽覺を教育し保護して自然の發達を助け、適當なる刺戟を授けて之れを練磨するやう、例へば玩具の如きも再三再四趣味ある新らしき物を與へ、又は戸外の自然物に接せしめて、其求知心の發作に對する滿足を與へねばならぬ。其數限りなき質問に接しても、嬰兒の理解し能ふ健全なる解答を與へて智的欲望を誘發し、一方には其盛んなる模倣性を利用し、常に正しき行爲、善美なる言語を示めて良習慣の基を作る等一擧一動にも注意を怠たつてはならないのである。

嬰兒の感情は其初期に於ては單に恐怖と憤怒が反應的に現はるゝに過ぎないのである、故に苦痛、不快の表情が先きで、快樂の表情は餘程後である、生後五十日位を經ざれば笑をもらすことなきも、顏を顰めて泣くのは初生當時に於て現はれて居る、是れ卽ち未だ何等の自發的發表を爲し得ざる嬰兒が、他に對つて保護を要求する自然の妙作用である。

元來感情の表出と能動の働きとは密接なる關係を有し、往々相混同して現はるゝものである。例へば乳を欲して止まない場合に、若し之れを與へざれば、其要求と怒りの情とは混同して、大聲に泣き叫ぶのである、されば運動本能の發達卽ち吸吮、把持、致口、嚙咬、立頭、座居、匍匐、起立、歩行等の漸次發達するに從つて、次第に感情も增進して單純なる感情本能に基ゐて喜怒哀樂の表出を見るやうになり、滿三ケ年位に及べば友を求め家族を慕ひ、又は犬猫の如きものを愛する社會性の發達も現はれて來るのである。固より嬰兒の感情は悉く衝動的で極めて自己中心ではあるが、一方には非常に美はしき他愛の心が表はれて居る、他の兒童の泣のを見ては同じく泣き出だし、母の病床にあるのを見れば一種憂愁の色を浮べるのである、しかし又智識に乏しき嬰兒の本能的感情は其表出にも矛盾多く彼の母を喪ひたる可憐の孤兒が、其葬送の日に多くの人の集り來るを見て喜こび、會葬者をして不覺暗涙を催さしむるは

屢々見るところの實例である。又た他人の感情に反應すること强く、四邊の人の心が知らず知らず嬰兒の感情となるので、母が電光を恐怖すれば必ず其の子も恐怖の念を起こすなどの例も少なくないのである。かくの如く保育者の態度如何は直ちに嬰兒に甚深なる影響を及ぼすものなれば、常に美はしき情操を保ち快活溫和なる態度を以て嬰兒に接し、苟にも憤怒憂愁の如き感情を起さしむる刺戟を與へてはならぬ、特に兒女は長ずるに及びて四圍の境遇如何により、動もすれば偏倚せる感情に支配せられ易く、爲めに狹隘なる性格を作ること多ければ、其嬰兒時代に於て健全なる情育の基礎を養はねばならぬのである。

嬰兒の意志は身體の發育に伴ない自發的に發達し、殊に運動本能に基くものである、其初期に於ては最も手足の壓力が强く、此運動々作が能く自己保存の力を强めてゆくもので、母の膝を蹴り指を握る等の行爲も、無意識的に意志の基礎を作つてゆくのである、而して漸次に發達して手足を別々に働かせるやうになり、又乳齒を生じて物を咬み、頭を眞直に保ち、自ら匍匐し、起居し、歩行することなど、皆意志の働きが加つて來て居るので、嬰兒の一擧一動は決して無意味のものではない、常に何等か意志的活動の基礎をなして居るのである。されば將來鞏固なる意志の活動を營ましめんとならば、須らく此時期に於て其習慣を養成しなければならぬ、故に營養に、衣服に、住居に、常に周到なる注意を以て運動本能の發達を補佐し、稍長ずるに及びては適當の刺戟を與へて益々其力を强めなければならぬ、後日如何なる障害誘惑にも打克つて己れの意志を貫徹する偉大なる人格は、矢張り此萠芽の發達に外ならぬのである。

要するに智、情、意を通じて精神的訓育をするのは、嬰兒なればとて忽がせにすべきものではない、身體の養育と相俟つて甚だ大切なることである。保育者は深くこゝに意を用ゐて其自然の發達を導き、故意に矯め或は進ましむるが如き不自然の教養法は全然避けねばならぬ、我が國民の早熟の弊に傾き易いのもかゝる所に原因することが少くな

いのである。前にも述べたる如く一通りの發達を遂げるには二十五年を要するのであれば、嬰兒時代には其發育の狀態に應じて適當なる教養をせねばならぬ、三つ兒の魂百までの俚諺の如く、此時代に於て一たび訓育の方法を誤まつたならば、長ずるに及んで如何なる教育の形式を施こすも、到底完全なる性格を作ることは出來ないのである。

第三章　幼兒時代

第一節　身體の發育

滿三年より滿六年に至る幼兒時代は、嬰兒時代を承けて同じく心身の發育が速かなる時代である、五官々能は外界の刺戟を感應して心意の發達を助長し、消化系統は益々發達して諸機關の作用を活潑ならしめ、四肢は絶へず活動して筋肉の發育を來し、身體も精神も共に其數量を增加し成長してゆくのである。

而して幼兒活動の最初は嬰兒時代に述べたる如く、凡ての動作が尙ほ本能的にまた模倣的に現はるゝので其一擧一動一言一語は無意識的に衝動し模倣して働くのである、しかし段々成長するに從ひ觀察、疑問、思考、理解等の能力を生じて來るやうになり、運動は更らに旺盛となって殆ど一瞬時も靜止することなく、絶へず何物をか經驗し熟練して習慣を作り、習慣積集して一生苦樂の岐るゝ運命の基を作りつゝあるのである、されば保育者は最も宜しき境遇を與へて、其活動を指導し圓滿なる心身の發達を得させねばならぬ、フレーベル氏の唱道せらるゝ根本主義は、此幼兒の自發的活動を指導するのであつて、幼兒保育の主眼は實にこゝに存するのである。

西洋の格言に、健全なる精神は健全なる身體に宿ると云ふことがある、是れ實に千古不磨の眞理にして健全なる精

神の發達を見んには必ず身體の健康を要するのである、人一度健康を失ふときは、智も用ゆること能はず勇も施こすこと能はずで健康は人生幸福の至寶と云ふべきである。されば幼兒時代に於て、其本性とも云ふべき活動を自由に行はせて身體を練らせ、常に快活なる精神を有たしめて一生に渉る健康の基礎を作らせねばならぬ、しかしたゞ活動ばかりでは眞の健康を得ることは出來ぬ、衣食住の三者が大なる關係を有することは云ふまでもないことであれば衣服の如きは身體の各機關に對して、拘束不自由を與へぬやうに注意することが緊要である、今日用ゐらるゝ帶紐等を緊括するときは、筋肉骨格とも柔軟なる幼兒の發育を害し血液循環を妨け内臓機關を壓迫して、遂に種々なる疾病を醸もすやうな不幸を見るに至るべく、又常に薄からず厚からざるやう適當に着衣せしめて、其皮膚を强からしめ、衣服の質を選ぶにも蓄溫に富み溫氣を避け空氣の流通よく、氣候の激變に遇ふても健康を害はぬやうに最も良き物を用ゐねばならぬ、木綿毛織物等は幼兒の衣服として適當のものである、又外出の際は必ず帽子を用ひて日射病を防ぐとか、靴等も足に恰好なるものを穿たしむるとか、出來得るかぎりの注意をせねばならぬ、又幼兒は時を問はず處を選ばず、活動嬉戯して衣服を汚がすこと多きも、强ちに之れを禁制し之れを叱責すべきではない、適當の保護を與ふべきである。居室の如きも光線の透入十分にして空氣の流通よく、閑靜にして淸潔ならしめ、幼兒の手に觸れて危險なる物品は、之れを他に移して自由に活動せしめねばならぬ。又食物は身體の發育の根本ともなるべきものなれば、專ら其體質に應じて過不及なきやうにつとめ、徒らに好惡に任せて營養を不足ならしめ消化機關を害してはならぬ、其他種々なる方面に渡り細心なる注意を用ゐて身體の發育をはからねばならぬ。

第二節　精神の訓育

身體の發育と同時に、幼兒の精神は日一日と進歩して來るのである、智力の發達は素より、道德觀念の萠芽も見へ

初めて來るのである、元來道念は決して教へらるゝものにあらずして、唯道德的秩序の基礎を爲すところの諸能力を練磨し、覺醒し、啓導して之れを發展せしめねばならぬのである、何等の經驗をも有たない幼兒には道德の說明や、訓話は甚だ效力のないものである、幼兒自身の活動を導きて良習慣を作り四圍の感化により之れを助長せしめぬばならぬ、感化の大なるものは、勿論家庭である、それから社會の感化である、故に幼兒に最も近親なる父母兄弟姉妹朋友の言語動作は、正邪を問はず理非を分たず忽ち幼兒に反應し模倣せしめて、知らず〳〵の間に其習慣を作つてゆくのである、例へば些細なる過失に對して之れを糺すは體罰を以てすれば、幼兒は直ちに之れを朋友に誡みるのである、之れに反して父母が他人に對しまたは家庭に於て言語動作凡て溫雅を旨とせんか、幼兒も亦淑やかなる性情を養はれてくる、偶々自己尊稱を用ゐて「私がおつしやいました」「私がなさつた」等の過まちを見るは、畢竟家庭感化の一端を窺はしむるのである。又試みに幼兒をして活動の激げしき實社會に接せしめんか、必ず自己が成人の後に於ける希望の片影を印象せらるゝので、それが必ずしも永續すべき目的とはならざれども、後來自己も亦此活動社會の間に立つべきものであると云ふことは、髣髴として意識して來るのである、これが卽ち生涯の目的を定むる萠芽となつて居るかも知れないのである、且つ此等の社會的印象によりて道德の觀念を養ふことは多大である、例へば工場に於て多くの職工が、辛苦を厭はず流汗淋漓孜々として勞働するのを見る時は、其小さき心の中にも同情努力の道念が呼起されるのである、又病人、不具者に接すれば既に憐愍、同情の念を表するを見るので、其他運動遊戲の間にも同情、從順、共同、努力、自他の關係に對する種々の美德が芽ぐんで來るのである。

智的方面に就ても、幼兒が自然界、人事界に接觸して種々の印象を受け、又之れを發表することに依り、次第に其智識を增し加へて來るのである、幼兒の最も喜び最も親しむのは自然である、此自然界の萬象に接觸見聞する事によりて、或は疑問を生じ、興味を起して、之れを觀察し探究せんとする研究心を養ふのである、卽ち科學的頭腦はかく

して漸々に其崩しを見るのである、保育者は能く此間の消息を解して適當の指導を怠たつてはならぬ。「風は何故吹くのであるか」「花は散つて何處に行くのであるか」「雷は何物であるか」等自然の現象を理解せんと欲して、種々の想像を逞ふし質問を起こすのである、而かも執拗に其原因結果を探知せねば止まない、其答は甚だ難事にして教育なき母親には、これほど困ることはないのであるが、此際能く其煩を厭はず親切に幼兒が了解し得る程度に於て應答理解せしめ、心意活動の增進を促がさねばならぬ、夏の夜電光の閃めくを見て不思議に思ふ時、幼兒等が最も興味を有せる電車等の關係を語らば、更らに一段の驚異を惹くのである、田野に遊びて草花を摘み、昆蟲を捕へて嬉戯する間に、幼兒の興味と觀察力を養ふことは驚くばかりにして、往々大人の心づかざる微細なる個々の特性や、形狀を知つて居るのである。されば幼稚園などにて蝌蚪の卵子を小さき瓶の中に養ひ毎日其發育の狀態を見せしむるが如き、或は草花の種子を播かしめて培養せしむるが如き、幼兒の無上の樂しみとする所である、かやうに此等自然界に對する觀察力や、想像力や、思考力や、趣味を養ふやうに導いたならば、やがて科學的智識の基礎を築くことが出來るのである。由來我國女子は一般に科學的智識に乏しきことが缺點であれば、幼兒時代より此方面の教育は十分に注意をせねばならぬ。

又幼兒の興味を有する手工の如きは、啻に科學的智識を得せしむるに必要なるのみならず、之れを利導して行くときは、經濟的觀念の養成にも多大の效果を見ることが出來るのである。抑も幼兒は一の構成的本能を有し、自然界、人事界に於て印象せられたる事は必ず之れを發表せんことをつとめて居る。二三の木片を手にすれば、直ちに何物をか構成せんとし、一枚の紙を得れば或は揉み或は展ろげて何物をか發表せんとするのである、彼の木片を集めて家を造り木を植ゑ石を配らべ山を築き池を穿ち竹葉の舟を作りて喜ぶやうに、自然の與ふる材料を以て適宜に利用し工夫して居るのである、圖畫などにても其の目擊したる事物を寫さんとし、或ひは自己の想像力を發表せんとし、苦心し

て之れを描いて居るのである、是れ等は皆幼兒の工夫力、思考力、構成力を窺ふことが出來るのみならず、かくの如くして次第に其の智識は確實となり、手指の熟練によりて意志の訓練を來たすのである。しかし幼兒の構成力は尙ほ頗ぶる散漫にして統一がない、目的あつて作るのではない、意識して構成するのではない、保育者は之れに意義を有たしめ、目的を悟らしめて行かねばならぬ、かくすれば一段の興味と喜びをもつて、更らに工夫構成の力を開發することが出來るのである。

前述の如く、幼兒は自然活動の中に身體精神の發達をなして行くのであるが、此活動は何時も一定の型を有つては居らないで、觀念の變遷、心意の發達に從つて、其行動を異にし種々新らしき能力を表はして來る、卽ち幼兒の世界は次第に廣まつて來るので、日一日と新らしき印象を受け新らしき活動を生じて來るのである。之れを善良に導き健全に發達せしむるのは、母たり保母たるものゝ重大なる任務である、若し誤つて之れを輕視し教育なき子守や、下婢にのみ幼兒を委ねて、自己の勞を避け、或は惡友の感化を恐れて戶外に出づるを禁ずるが如きは、一は放任に過ぎ一は自由を壓迫して、共に恐るべき結果を見るに至るのである。或は又幼兒の行動に對して其原因を尋ねず、只其結果のみを見て徒らに之れを叱責し抑壓し、若くは之れを賞賛せんか、決して善良なる效果を得ないのである、能く幼兒の個性、特質、長短を辨へ、適切なる教育の方法を取らなければならぬ。

幼稚園は家庭以外に幼兒活動の天地を廣むるところの小社會である、而かも平等に且つ自由なる小社會である、能く家庭の缺陷を補ふて幼兒の發育を整齊ならしめ、殊に社會性を養ふに最も適當の境遇である。又近來子守の教育に就て段々世人の注意を促がし特志の小學校教師等によりて、子守學校とも云うべきものを設け其教育をはかって居るところもある、之れは眞に結構なことで、兒童の多い家庭には勢ひ子守の必要を見るので、子守の無智や、下劣なる趣味や、節制規律なき性格によりて、如何に兒童に惡影響を及ぼすやは寒心すべき問題である、教育ある子守を養成

するのは兒童教育の上より見て緊要なることである。

要するに現今我國の婦人が、母として保母として幼兒保育の任を全ふして居るかどうかは、餘程研究して見るべき問題で、少なくとも改善せねばならぬことは多々あるのである。畢竟從來女子教育の等閑に附せられし積習の致すところであれば、今後の婦人は先づ自らを教育して完全なる保育者の資格を備へねばならぬのである。婦人の任務は家庭に在るは云ふまでもなきことながら、社會國家の實狀や世界文明の趨勢を知らずして將來の國民を教育することは、木に緣つて魚を求むるの愚を學ぶのである、女子教育普及の急務は之れを見ても分るのである。

第四章　初等教育時代

第一節　心身發育の狀態

初等教育時代とは、滿六年より滿十二年に至る義務教育卽ち尋常小學校時代を指すのである。兒童は此期に入り身體も精神も次第に發育して學業にたへ得るやうになり、始めて所謂學齡に達し、其教育の重なる部分は家庭より轉じて學校に移つたのである。素より學校は教育の全部にあらず、學校に入學せしむれば教育の責任を全く學校に移して了つたかに考へ、家庭に於ては何等の注意を用ゐざるが如きは、誤りの甚しいのであるのみならず、學校教育の效果を家庭にて破壞して顧みないやうな矛盾があつてはならぬ、家庭と學校とは、兩々相須つて兒童教育の效果を擧げることにつとめなければならぬのである。されば此時代學校に於ける教育の方法は父母たるもの十分之れを辨知して適當なる啓導を與へ、學校の教師も亦家庭の狀態を詳かにして、教育の有效を圖らねばならぬのである。

先づ生理的方面より身體の發育を見れば、兒童の始めて學齡に達する時は、兒童研究に所謂幼兒後期に移る更り目で、腦髓は此時殆ど四分の三以上の大さに達し、身體發育の一變化の時機であるのみならず、從來と異なり規律的にして、且つ遊戯的生活より努力的生活をなすべき境遇に移るので、兒童にとりては非常なる變化と云はねばならぬ。されば最初一學期の間は、幼稚園保育の狀態と餘り懸隔なきやう、半ば遊戯的に自然的に教育すべき必要がある、例へば算術にては、球の遊びなどにて其數を數へしめ、或は草花の種子を播き其生へ出るに從つて數へしむるが如き、修身にては、想像作用の强盛なるを利用して適當なるお伽噺を聞かしめ、興味の中に教訓を與ふるが如き起居動作の行儀を教ゆるにも、自發的活動性を利導して身體四肢を動かし實地の事を働かしめ、其間に習慣を養ひ腦中樞と筋肉運動との關係を密にするが如く、凡て生理的要求より趣味あるやうに教授し、漸次努力の習慣を規律的行動に導き入れねばならぬ。

此の如く生理上の變化や境遇の變化により、神經作用も兎角興奮し易く、往々夜驚病等を見ることがある、家庭に於ても常に注意して餘り神經を刺戟せぬ樣につとめねばならぬ、「今日は何と云ふ字を習つたか毎日々々學校に通つても何も出來ない」とは親が我子を思ふ一心より、教育上の利害得失を辨へずして輕々しく口にするところであるが、大に愼むべきことである。一二學年の頃は所謂人生の三大危機の一と云ふべき乳齒を失ひ永久齒を生ずるの時であつて、突然に發熱し、神經質の兒童は神經痛を起こし、咳嗽を發し、急に靑ざめ衰弱を來たし、頭痛、眩暈を催ふすことがある、精神上にも非常の變調を來たし、我儘、剛情、不平、嫉妬等の狀を表はすことがある。されば學校と家庭とは、能く連絡して此場合の取扱を誤まらず適當に保護教育して行かねばならぬ、尙智識の門戸たる眼、耳、鼻、口等の諸機關や體格姿勢等に就ても、十分の調査をなし、病氣缺陷あらば其手當を怠つてはならぬ、要するに身體の全部を完全に成長せしむる爲めに、食物、運動、遊戯、衣服、睡眠、採光、通氣等適宜の狀態を保たしめ、衛生

體育の方面に細密する注意を用ふべきである。

又此時代より十四五歳までの間は、恰かも筋骨系統の盛んに發達する時期にして、生理上の必要より自然に運動が盛んになって來て、單純なる遊戯に滿足せず、同じ運動機械にても出來るだけ複雜なる動作を敢てし、自由自在に各種の運動を試みて居ることは實に驚くばかりである。かゝる生理的要求の時期であるが故に、成るべく郊外に遊ばしめて清潔なる空氣を呼吸せしめ、自然を友として其間に體力を練らせ、又十分筋骨の發達を助くるやう設備をしてやらねばならぬ。殊に十歳より所謂少女期に入る時なれば、身體各部を均齊に、十分なる發達を遂げしめねばならぬ、又心理作用も次第に複雜となり、名譽心、競爭心等の爲めに健康を害することも少なくないのである。

彼の學校病と唱へられて居る近視眼、脊柱の彎曲、神經衰弱、頭痛、筋肉薄弱、貧血、消化不良等の疾病は、多く學校の設備卽ち机腰掛の不完全、採光、通氣、溫度等の不適當、兒童姿勢の不正、及び心理狀態より影響する腦の過勞等が原因である。父母教師は深く其原因を探ぐり、なるべく身體の發育上に變調を來さず、圓滿の發育を遂げしむることに注意し、且つ保護せねばならぬ、不幸にして一度疾病に罹るときは、生理上にも心理上にも其發育に影響を及ぼし、兒童狀來の發展如何に關するのであれば、延いて國力の消長にも關する譯で、單に家庭學校の問題のみではないのである。

さて初等教育なるものは、國家が國民に强制するところの所謂義務教育にして、小學校令に規定してある通り、「道德教育及び國民教育の基礎竝びに其生活に必須なる普通の智識技能を授くる」を以て本旨とするのである。而して此土臺の上に更らに中等教育を施こし高等教育を授けて、國民の主腦となるべきものを養成してゆくのであるが、國民の大多數は此義務教育を以て終るものなれば、此階級の國民の健否は國家の强弱の岐るゝところとなるのである、されば我國の將來は如何なる性格ある國民を要求するのであらうか。今や世界の列國は各商工業を以て其覇權を

爭ふて居る、此競爭場裡に立ち國力の發展を計らんとするには、先づ我國民性の中に尤も缺如たる經濟的の性格を養はねばならぬ、科學的智識を進めねばならぬ、更らに道德的品性を高めねばならぬのである、卽ち此三方面の教育こそ我國民教育上の國是とし方針として、政治家も教育家も力を戮せて其普及を計らねばならぬ、而して初等教育に於て先づ之れが效果を擧ぐることに努めぬばならぬ。

第二節　科學的教育

科學的教育の材料となるものは、自然物及び自然現象である、此等の材料は人間の生活に密接なる關係を有し、從つて甚だしく其好奇心を惹き起すところのものである。由來哲學も科學も之れより起り、宗教も亦源をこゝに發して居るので、人類文明の發達は此自然物と自然現象によりて誘發せられて來たのである、兒童發達の順序も亦酷だ之れに似たもので、何等の智能なき兒童は其五官を刺戟するところの周圍の事物一として不思議ならざるはない、漸やく己れの意志を發表することの出來る言語を覺ゆるに及べば、直ちに其疑問を解釋せんことを欲して頻りに質問を發するのである、此質問を利導して兒童の智力を開發するのが卽ち科學的教育の始まりである。卽ち兒童が每日の嬉戯の中に、作業の間に、時には昆蟲を飼育して其變化の狀態を觀察し、草花を栽培して生長の順序、開花、結實の模樣等を實驗し、或はそれを圖畫や粘土細工に現はし、或は標本を製作し其實物乃至標本、圖畫、粘土細工は直ちに室內の裝飾となり、父母親戚朋友への贈物となり、時には病者の慰樂となり、かくして日々新たなる實驗的智識を加へて來るのである。其興味の高潮に達せし時などには實に天眞の詩や、歌となって人を驚かすことは珍らしくないのである。其他風の吹くのも雨の降るのも草葉の露も雪の飛ぶのも地震も雷電も四圍の事物は、すべて彼等が研究の材料である、其質問は兒童なればとて決して馬鹿にはならぬのである。理化學、博物、天文、氣候、氣象、地理等より人身

生理、器械製造等に至るまで、種々雜多の質問を發するのである、其機會〳〵に指導宜しきを得たならば、益々求知探究の心を促進し、觀察力、思考力、理解力、辨別判斷の力を發達せしめて科學的思想を養ふのみならず、自然研究の結果は審美的情操を育て、經濟的品性を作り、道德的觀念を養ひ、宗教的信仰を築くの基礎となるのである。是れ大に母たり教師たるものゝ力量に俟つべきところで、若し兒童の腦裏に宿りたる此等の思想が其日常生活の上に實現して來るやうになつたならば、家庭社會の改善となり教育の效果を見ることが出來るのである。從來我國教育の弊として學問と實際とは未だ十分に融合して居らぬ、卽ち實際の生活に教育の效果を及ぼして居るものが少ないので、數十年前の家庭と今日の家庭と餘り違つて居るところが見へない、依然として舊思想舊習慣に支配せられて居るのである。是れ學問が形式となりブツクノレジとなつて眞の能力となつて居らないからである、殊に科學的智識に於て此感を深からしむるのである、故に兒童時代に於て其受けたる諸々の印象はつとめて之れを發表せしめ、常に研究的態度をとらしめて頭腦を鍛練し、確實にして能く活動するところの智識能力を養ふことが極めて大切なることである。

第三節　國家的經濟的教育

此方面の教育は學校教育に於て一般に缺けて居るところである。こは寧ろ我國教育の古來よりの通弊で教育の效果の認められない一原因であり、學問は迂遠なものであるとの毀りを招く所以ではあるまいか。今日世界に於ける我國の地位關係はどうであるかと考ふるに、幸にして前きには淸國と戰つて之れに勝ち、後には露國と戰つて之れを破り、國威隆々として大に列國の畏敬を受けて居る、しかしながら干戈の戰爭は度々起るものではない、一刻も寸時も休まないのは商工業の戰爭である、列國は各相競ふて此優勝者たらんことを爭ふて居る、我國も須らく智を竭くし勇を鼓して此戰場に馳騁せねばならぬのである。然るに我國の現狀は之れに對する十分の準備を有して居るであらう

か、國債は二十億の上に出で、工藝商業もまた容易に歐米の列強と比肩することは出來ないのである、國民は男女の別なく國家の運命は各自の頭上に繫かつて居ることを自覺し、國力の充實發展に力を致さねばならぬ、初等教育時代に於て經濟的品性の基を作らねばならぬ必要は自ら明かである。素より兒童の頭腦は單純幼稚にして此等の道理を理解する力はないのである、亦之れを理解せしむる必要はないのである、只經濟的品性の基礎となるべき諸々の習慣傾向を養成して後來の素地を作つて置くのである。

凡て兒童の教育は、善良なる習慣を作ることが最も大切なことであつて、經濟的品性に必要なる自治心を養ふにしても、先ず着衣のこと、部屋の掃除、机、文具の整理等成るべく自分の事は少々困つても自ら之れを爲さしむる習慣を作り、獨立自營の精神を養ひ玩具を弄ぶにも大切に取扱ひ其始末を嚴重になさしめ、物を無駄にせぬ習慣を養ひ、又廢物を利用して自ら玩具を製作せしめて己れの用に供せしめ、或は商業を模擬したる遊戯をなさしめ、或は園藝に、農事に、手工勞働の趣味實益を解せしむる等、生產的能力の萠芽を啓發誘導し、個人的經濟の習慣及び觀念の基礎を築かねばならぬ、而して漸次教科書との連絡を結び國家經濟的の思想に融合せしむるやう教育せねばならぬのである。

第四節　道德的教育

道德的教育の主眼は云ふまでもなく人格の教育である、人格を養成するに最も必要の條件は、其父母教師の人格と其人格より生ずる家風なり學校の校風である、凡て兒童は父母を理想とし教師を無上の權威あるものと信ずるので、父母教師の思想、言行、習僻は、直ちに兒童に薫染して其習慣品性を作るのである、父母教師の人格は實に兒童の品性を淘冶する源泉である。

而して小學校時代の兒童を教化するには、始めは幼稚園時代と同じく意識的智力に訴たふるよりも、寧ろ無意識的薫化につとめねばならぬ。人は感情の動物である、如何に修養深き人と雖も喜怒哀樂の情は常に動くのである、悲しき事、苦しき事、腹立しき事喜ばしき事等快苦の感情は、一上一下斷へず波立つて居るのである、此感情に打克つことは實に至難の事である、されども感情克制の力なきものは、到底人を感化することは出來ないのである、父母たり教師たるものは内に如何なる困難を有するも、兒童に接するにはつとめて平靜を保たねばならぬ、此情調の如何は直ちに兒童の氣分、性質、傾向を形成するのである、兒童なればとて欺きたり誤魔化したりするのは大なる誤りで、何處までも誠と、愼みとを以て之れに接せねばならぬ、父母教師の情調と態度とは兒童を通じて家風を作り校風を作り、又更らに反映して兒童に感化を及ぼすのである、此感化により兒童の精神的生命を養ひ、社會の惡風に染まず惡友の感化を受けず、却て境遇を善化して行くだけの力を與へねばならぬのである。

次には反覆實行により作業によりて善良の習慣を固定せねばならぬ、卽ち筋肉の活動と大腦中腦の結合との關係を密にするのである。一二學年の頃は主に此方法によりて習慣を作り、お伽噺、神話、寓話等により、三四學年に至れば歷史的實例を加へて情操を養ひ、智的教訓を加へて智識を練つてゆかねばならぬ、更らに進んでは意識的陶冶卽ち重に智識的教訓により感情を喚起し、兒童の實際生活に連絡して意志に變化せしむることが必要で、五六學年に適當する方法である。又た常に或は遊戯場に於いて、或は教室に於て、或は家庭に於て、兒童に起るところの實際問題をとらへ、其機を失はず思想を善良に導き判斷力を練り、過を改め正に遷らしむるやうに注意せねばならぬ。而して一二學年に於ては重に習慣を養ふことゝし、三四學年に於ては尙ほ上に柔順にして下を撫はり、五學年に於ては道德的意識を明確にし上を助け下を導き、六學年に至りては全校の模範となりて之れを指導するの態度をとらしめ、自治自營の精神を發揮せしめ善良なる人間となるの自覺を懷かしめねばならぬ、其他朋友間の制裁に萎縮せざるやう注意

し、又殘忍性の發現を善良に導かねばならぬ、殊に五六學年の頃は少女期に入るの始めにて、動もすれば女々しく卑屈になり易きが故に、つとめて快活なる動作を奬勵せねばならぬ。

從來の教育が形式に陷れるは、前に述べたる通りであるが、特に道德教育に於て最も甚しき傾向がある、我國古來よりの女德なるものにも幾多の改善すべき點がある、或は謙遜と卑屈と混同し、柔順と盲從とを誤まり、虛僞虛禮を高尚優美と思ふが如き、其他時勢の變遷進化に伴なひて、道德の標準もまた變遷進步して來るのであれば、初等教育時代に於て、國民道德の歸趣を誤まらぬやう甚深なる注意を用ゐねばならぬのである。

第五章　中等教育時代

第一節　教室外教育の必要

滿十二年より十七年に至る高等女學校時代が卽ち中等教育時代である。此期間は女子に在つては、心身の發達變化に最も注意を要するのである。女子は凡て十三四歲に至れば、身體の諸機關が一通りの發達を遂げ、一少女は成長して一婦人となるのである、これまでは無邪氣に衣食し嬉戲して、唯模倣的に生活して來たのが、此時より俄然夢の醒めたる如く、我が身體我が能力を顧み、こゝに始めて我れの存在を明確に意識すると同時に自己以外の個人の存在をも明かに認め、又家族間の關係、國家社會の關係より宇宙の關係等をも漸やくに了解して、我は人なり、婦人なり、日本人なりと自覺して其責任を感ずるに至るのである。故に教育者は此時期に於て、一層周到なる注意を以て保護指導し、心身の要求を察して適當なる訓練を施こし、自由に健全に成育せしめて生涯の良傾向を作らしめねばならぬ、

家庭に於ても學校の教育と歩調を一にして其效果を收めしめ、苟にも之れを破壞し冷却するやうのことがあつてはならぬ、今は重に學校教育の方面に就て述べんとするのであるが、其精神に至つては家庭の教育に於ても之れに則つてもらいたいのである。

學校教育に於ては、教室で授くる學課の重んずべきは當然のことであるが、尙ほ他の半面に於て輕んずべかざるものがある、そは教室外の教育とも云ふべきもので卽ち學校内に教育上必要なる諸機關諸設備を有し、一の理想的小社會を形成し、生徒は此境遇に順應し自動自省することによつて受くるところの教育である。從來我國に於ては學校教育と云へば唯教室内の教育を以て了れりと考へ、教室外の教育は往々看過されて居つた爲め、教育と實生活とが一致せず、從つて教育效果を全ふすることの出來なかつたことが少なくないのである。

教室外の教育に必要なるものは、先づ第一に良き指導者ある自治機關である。注入的教育の形式に流れて實效の擧らざるは夙とに世人の認めて其弊にたへぬところである、開發的の教育を施こし生徒をして自奮自修の習慣を養はしめ、自ら活動して其能力を練磨せしめ、以て教育と實際生活の融合をはかるには、此自治機關の極めて必要なるを認めるのである。然らば自治機關の組織は如何、例へば教室の整理、整頓の事、生徒各自の風儀上の事を注意する係、體育衛生に注意して全級の健康增進を務むる係、教科書以外の讀物或は思想上に關する事に注意し、高尙なる趣味を養ふ事を務むる係、近來多數の女學校には校園の設けあれば、園藝或は教室の裝飾等自然に對する趣味を養ふ事を務むる係、或は級費、料理費等を取投ふ事あれば、此等によりて經濟思想を養はしむる係、全級の傾向を考察し、他級との連絡を計り常に精神上の進歩を務むる係等、卽ち整理係、體育係、文藝係、農藝係、經濟係、代表者係等の各係に分ち、生徒をして各々之れを分擔せしめ、各自其級の必要に應じて一年間の計畫を立て、之れを全級の生徒に謀り又全校の生徒に謀り、玆に全校に施こすべき大體の方針を定めて實行することを約束せしむるのである。かくて一年

間の結果を見せしめ其成績を批評せしめて、更に來學年の計畫を定めしめ、之れが爲に或は各係の會を開き或は修養會を催ほし、各自其責任を重んじ自治の思想、共同一致互に相救くる精神を養ひ、或は實際問題を研究して其理想を實現せしめ相互に督勵して進歩を計らしむるのである、要するに生徒をして自働的に教育をうけしむるところの機關である。

又家庭生活の實驗として寮舍の設備が必要である、從來學校の寄宿舍は多人數雜居の結果兵營的の生活に近かつたので却て家庭生活の情趣を破壞するの弊を免かれざるの觀があつた、しかし近來に至り漸々其弊を認めて之れを改善し家庭的寮舍の組織を見ることが多くなつたのは大に喜ぶべきことである。我が女子大學の寮舍は凡て自治制度を用ゐて、先づ二十七八人を一家族とし、之れが監督指導の任に當る寮監を置き、上級生を交代に主婦に任じて家事を掌り一切の經營に當らしめ、寮生をして亦交る〳〵庖厨、酒掃の務めに服せしむるのである、其他食物係、經濟係、體育係、園藝係、文藝係、整理係等の任務を寮生に分擔せしめ、各方面の智識實驗を應用して日常生活の研究をなし其改善を計らしめて居る、而して各寮其傾向趣味により境遇により或は其寮の歴史により自から獨特の寮風を有するので、宛然一の社會をなして居るのである、又各寮合同して研究會修養會を開き、或は交際會を催ほし互に其長を學びて其短を補ふことをつとめ、或は大祭、祝日、節句、記念日又は生徒の誕生日等時に隨がつて趣味ある會合を催ほし、高尚にして健全しかも溫かなる一の家庭を作つて居る。其他學校内に社會的諸機關を設備し實驗應用の境遇を作ることが必要である。例へば商業部、園藝部、牧畜部、共同購買會等を設けて社會的智識を與へ、生活場裏の實相を知らしむる事を得ば、啻に勞働の趣味や經濟の觀念を養ふに裨益あるのみならず其智能を活動せしめ其思想を質實ならしむることが出來るのである。

かくの如き分業的に又研究的に生徒をして其責任を盡さしむることは、女子の通弊たる依賴心を去り、自ら考へ自

ら判斷し自ら働くところの良習慣を作り、一方には人と共に事を爲すの美風を生じ、忍耐、克己、謙遜、犧牲、協同の諸德を養成して、學問が有效に適切に役に立つて來るのである。世の父母たるもの只子女が試驗に好成績を得んことをのみ痴案して思を此點に注がず、教室外の教育の主義を了解するもの少なきは教育の爲め眞に憂ふべきことである。

第二節　科學的教育

既に初等教育の章に於て論述せるやうに、我國現今の情勢より教育上の方針として執るべきところの科學的教育、國家的及び經濟的教育、道德的教育の三綱は、此時代に於て一層痛切に其必要を見るのである、何となれば中等教育は凡ての教育の中堅とも稱すべく、智識は益々明確となり、性格は愈々成熟して來るところの最も大切なる時代である、此時に於て一たび教育の道を誤まつたならば後の教育に於て容易に之れを改むることは出來ないのである。

我國民殊に女子に最も缺けたるは科學的品性である、さなきだに感情的、想像的且つ衝動的となり易い女子が積年の遺傳と、從來女子の嗜好に適したる文學的教育とにより、益々其性情を偏せしめ、一方には實際に智識を活用する機會の少なきが爲に其教育は形式に流れて實際に疎く、少しく複雜になる理論は正確に解し得ることが出來ないものが多いのである。新しき器機の應用、舊來の陋習の改善等容易に女子の頭腦に入り難く、社會の進步を妨げて居ることが少なくない、科學的智識を與ふることは目下の急務である。

極めて元氣のよい一二學年の生徒は決して狹くるしき教室內に跼蹐しては居らない、天地の自然物に對して多大の興味を有して居るのである、彼等の小さき腦裡に映ずる森羅萬象は悉く是れ詩的なり、不可思議なり、其激しき好奇心は此の現象に對して明確になる解釋を求めて止まないのである。されば此探究心や觀察力を利導啓發して花あり流

れあり蟲鳴き鳥唱ふ自然の教場、花壇、牧場、森林、原野等に於て親しく生ける動植物に接せしめ、又自ら播種し培養して花を咲かせ實を結ばしめ、其實の中には更らに再び植物となるべき可能性の潜伏することを知らしめ、或は毛蟲、蝌蚪の卵子等を養はしめては、其生命及び教育の狀態を悟らしめ、又蝶、蜂等の花間に戯れ啄木鳥の樹梢に生活せるを示して、動物と植物又は動物と動物との間に如何なる關係あるかを教へ、生存競爭、適種生存、相互扶助、自然陶汰、自己保存、子孫繁殖等の法則が啻に生物の間にばかりでなく、人間の社會的生活をも支配して居ることを觀察せしめて、進化の理法を了解せしむることが出來るのである、其他自然研究の結果を寫生して圖畫の技能を發達せしめ、花卉培養の日記は直ちに作文の助けとなりて想像觀察を正確ならしむるのである。

又地理學に於ては天氣、氣候、風雲、雨雪等が己のが培養飼育せる動植物に如何なる影響を及ぼすものなるかを實驗觀察せしめ、漸次氣候と人種及び氣候と產物等の關係をも知らしめねばならぬ、斯の如くして常に自然に接せしめてゆくならば、校内にある土地の傾斜、小川、池、林等は自然地理の小模型となること、動、植、鑛物界の關係、循環の理も自から解するに至るべく、地圖の製作は傍ら數學的腦力を養ふことを得るのである。又外國地理にては我國に對する外國の位置を知り、地球世界等の觀察が始めて其腦裡に刻まれて來るのである。

かくの如く頭腦も五官も手足も同時に働かしめ、印象を受くれば直ちに之れを構成發表し、發表せるものは再び形を變じて更らに印象さるゝと云ふやうに、確實なる智識と應用力を得ることが出來るので、之れを只だ耳目のみを働かせ、生命なき標本圖畫によりて極めて抽象的に得たるところの印象に比較すれば、其左は非常なものである。かく幼少の頃より自然を友として學ぶ間にも遊ぶ間にも、事實の觀察、事實と事實との關係及び之れを支配するところの法則の一端を解することが出來るならば、やがて自然の眞理と美妙を感得して、敬虔の念、宗教の心またこゝに萠芽を發して來るのである。

一二學年に於ては動物、植物、鑛物等の自然を研究して宇宙の一部を窺ひ、次第に其推理力の進みたる時、三學年に至り更らに進んで物理學を學び、物體の變化、物質間に働く自然引力、水力、熱力、光力、磁力、電力等の性質及びエネルギー分子力等の法則を知るに及ばゞ、彼等の智識は益々範圍を擴めて來るのである。是迄無意味に看過し來れるきふすの蓋に小さき孔あることや、入浴の際水の溢るゝのや、開きたる戸に手指を挾みて痛みを感ずることや、一々其理由あることを發見し、蒸氣や電氣が工業界の革命を促がし交通の便利を來たして世界の文明を急轉せしめたることや、顯微鏡、望遠鏡により人間の小さき限界を自由に擴大して、高遠細微なる宇宙の祕密を明かにすることなど、如何に彼等の探究心を驚かすであらうか。究理の興味加はり來るに從ひ或は參考書を涉獵し或いは實驗室に研究を試み或は器械工場に注意をなして段々に工夫創造の力を養ふことが出來てくるのである、日常生活の器具等に學理を應用し最少の勞力を以て最大の結果を得るやうに、改善を加へ新工夫を案出することが出來るのは、皆科學的思想の發達より受くるところの賜である。

化學は物理學よりも一層微妙なる物質の構造に於ける變化を學ばしむるのである。其原子間に起る變化も、分子間に起る變化と同じく之れを支配して誤らざる法則を見出だし、此不思議なる化合力を或は食に或は衣に或は工業に應用して、人間生活に必要なる物品を製造することを理解して來るのである、彼の不用の物として捨てられしコールタールが、其中より貴重なるアニリン色素を分離することを發見せられてより、此廢物も一の缺く可らざる大切の物となつたやうに、一度物質に於ける化合力の作用を知る時は、世界に一の不用物なく悉く之れを利用してゆくことの出來るのが分かって來るのである。

生理衛生にては多數の單細胞が集成組織せるところの驚くべき有機體、卽ち細胞の集つたる諸機關、竝に此諸機關が集合して形成せるところの人體を研究するのである、此の諸機關が各々分業的に働く諸機能及び之れを統一して其

生活活動の目的を達せしむる神經系統の形態、構造、機能等を知り、健康と發育とは此諸能力を能く平均調和せしむることであつて、之れが不調和は疾病、死亡の原因であることを知らしむるのである。而して此等の智識を得ると同時に機械力でも、化學力でも、科學にては説明し能はざる生と死との觀念、或は此神經系統の機械的活動は又之れを支配するところの精神的心理的作用の存在すること等が自から腦裡に浮かび來るのである、此觀念は「人はパンのみにて生くるものにあらざること」を悟らしめ、人の人たる本分を自覺せしめて來るのである。

地質、地文學は天然物卽ち動物、植物、礦物の一大團塊たる地球が、幾千萬年の間間斷なき自然力の働くまゝに種々の變化を重ねて今日に至りし歷史と、今尙ほ變化しつゝある有樣とを説明し、今日の商工業時代に一日も缺べからざる石炭の如き、幾千萬年の昔の植物が受けし日光と熱とが、再び文明の發達を助くる働きをなして居ることや、此無言の石炭が樣々なる地球の變遷を語つて居ることを知らしむるのは如何に興味ある智識となるであらうか、天文學を學びては宇宙の關係や天體の現象を知り時間空間の無限を思ひ、無量無邊の宇宙の一隅に在る一小遊星に過きざる地球の一點に住み、一瞬の生命に活けるところの我々人間の小さなること、さりながら、此小さき我の中にも限りなく發達すべき智能の潛在して、之によりて大なる自然力を征服する力があることを悟ることが出來るのである。

かやうに研究して行く間に、一方には無限の興趣を覺へつゝ實驗、觀察、分類、綜合等の力卽ち科學的頭腦は漸々發達成長して來るのである。

第三節　國家的經濟的教育

前にも述べたとほり今は商工業の時代である、世界列國が競爭して其勢力を擴張して行くのも、詮ずるところ商工業の勝利を博して國家富强の基を確立せんとするに外ならぬのである、我國の女子に國家的觀念と、經濟的品性の缺

けて居るのは、國家の存立上看過することが出來ぬ、教育上此等の要素を振作するのは今日の急務である。

さて經濟的思想を最も能く教へ得らるゝは數學である。個人及び組或は係の經濟により始めて計算の術を教へ、次第に實業上の計算、其狀態、性質等を知らしめ、又尺度、桝目、衡量を實物にて學ばしめ日常生活に必須なる觀察力を養ふことが大切である、又歩合算等を教ふるに當りては損益、租稅、保險、利息、銀行手形、公債、株券等の活問題に接せしめ、或ひは勞働、分配、富と金錢等の實地を說明し自から是等に對する興味を惹き起さねばならぬ、更らに進んで代數、幾何を學ぶに至れば外資輸入、輸出入の結果、公債、株券、金銀塊の相場、外國爲替等より諸物價に於ける注意を促がし、活用の出來る算數を教えねばならぬ。

又習字、圖畫、造花等の手工により其筋肉を練習して緻密、整頓、手指の敏捷自在、忍耐、努力等の習慣を養なひ、進んでは審美的心情を涵養せねばならぬ、殊に圖畫は凡て有形的製作の基本であつて、美術工藝の根底であるから之れを奬勵するは、やがて美術工藝の進歩を計ることゝなるのである、されば一方自然界の研究によりて受くる印象はなるべく之れを圖畫に發表せしめ、之れによりて其興味を深からしむときは、此自然界に認めらるゝところの巧妙なる意匠はやがて彼等の意識を通じて美術工藝の上に表現し、從つて美術と經濟との關係を知らしむるに至るのである。

又自然研究に於て動植物を教ふるに當り生徒に與ふるに一定の土地を以てし、或は豆を植え或は苺を植えて培養せしめ、收穫の後は之れを寮舍なり、購買組合なりに賣り代金は銀行に預け置かしめ、來年種を下す時まで元利幾何の所得ありやを實驗せしめ、其他昆蟲類を學ぶ時は害蟲の驅除や、益蟲の飼養法を講ぜしめ、又校内に設備あらば養蠶、養鷄等を試みさせ之れを愛し之れを樂しませながら、一方に利益を得るの法を學ばしめなば段々に從來の弊習たる經濟を賤しめ、勞働を卑しむの風を改むることが出來るのである、

其他地理に於ては土地、氣候、物産等の關係を說くと共に、各國商工業の有樣、需要、供給、運輸、交通の理を知らしめ、其着する袴地も頭にかざす「リボン」も之れが輸入品なるか國産物なるかに思ひ到らせなば、從來會て念頭に懸けざりし商工業的觀念をもつて來るであらう。

裁縫は從來とても我國にて最も重視せられたる手工教育の一である、現今の社會にても女子には必要の學科で生産的よりも寧ろ消費を防ぐ爲めの事が多いのである。されば始めより自己の衣服の簡易なるものは自ら之れを裁縫するの習慣を作り、洗濯洗張の如き皆之れを自から爲すの法を敎へ之れを實行せしめねばならぬ、學校の敎授時間のみには裁縫に關する智識は之れを與ふることを得るも、十分練熟せしむるところに至り難きは止むを得ぬことなれば、家庭に於ては春、夏、冬の休暇に際して徒らに避寒、避暑の遊樂に日を費やさしめず、之を利用して練習につとめしむれば、學校卒業の頃までには概ね普通の用を辨ずるに至るは强ち至難のことではないのである。又此時代は審美的觀念が次第に發達して來る時で、裁縫等に於ても種々の美術卽ち細工物、刺繡、編物等に興味を有するやうになつて來る、或は廢物を利用し或は新らしき圖案を製作する等の工夫を奬勵して、消費經濟、生産經濟の觀念を養はしむることが必要である。

家事科の衣服に關しては原料買入、裁縫、洗濯、保存法より衣服改良の事をも考究せしむることを要する、從來我國の女子が主婦となりてより後は日々の時間の大部分は大抵衣服の始末の爲めに費やされ、之れに臺所の仕事を加へて主婦の爲すべき主たる任務となし其他は殆んど之れが副たるの觀がある、故に主婦は二六時中只裁縫料理の爲めに働きて寸暇なきも、社會は此等の婦人を勤勉なるものとして稱揚し、己れを進めん爲めに讀書し、研究の爲めに時を費やす時は、却て怠惰者(なまけもの)として貶するのである、婦人自らも此習慣に縛せられて毫も怪しむところなく安んじて舊來の方法を墨守して居るのである。しかし科學的敎育の結果は此等の事柄に多くの改良すべき餘地あるを敎ふるのであ

る、宜しく研究工夫して時間を節約し其餘力を生産的方面に用ゐしめねばならぬ、食物に就てもまた同樣で材料の選擇、使用法、廢物利用等に就て化學の學理を應用し、滋味ある營養物を經濟的に調理するの途を敎へねばならぬ、時としては卽座に献立を作らしめ或は價格を定めて料理をなさしめ實地の練習を試みさせることが必要である。住居に就ては家屋の建て方、建築の材料、庭園の作り方より諸器具の扱ひ方及び之が保存法等にも亦學理を應用して衛生と經濟とに適ふやう心懸けさせねばならぬ。

其他社交の事に就ては一人二人にて爲すことを得ざる事柄も、一村一市の婦人が協力するときは容易に之を爲し得る事業を、係や組の協同によりて知らしめ、殊に風俗習慣の改良、時間を守ることや、家内の秩序を善くして研究修養の時間を作り或は互に會合して智識、經驗の交換をなすが如きことや、到底少數の力にては實行の出來ざる事も、團體の力を用ふれば難事にあらざる事も、學校全體の協力により校風を作る事例によりて經驗せしめ、後來社會風俗の改良や、婦人の生産事業等に盡すことの出來るやう敎育せねばならぬ。

第四節　道德的敎育

科學的敎育と云ひ、經濟的敎育と云ふも畢竟之れ人格ある人を作らんが爲めの要素にして、今第三の要素として述べんとする、道德的敎育の材料と見るも不可なしと思ふのである、換言すれば善く學ぶは是れ善く行はんが爲めである、善く行はんと欲せば其實行努力の原動力たるべき高尙遠大なる理想、熱烈鞏固なる意志があって科學的經濟的の能力を支配することを要するのである、此理想とは眞善美を目的として之れに達せんとする理想である、意志とは自己の意志を去り人類全體の大なる意志と融合したる意志でなければならぬ、高等女學校時代に於ては道德敎育により此大なる理想と意志の根帶を培養し人格の基礎を作らねばならぬのである。

始めて小學校より高等女學校に移りたる十二三歳の小女は極めて無邪氣にして虚飾なく且つ正直なるものである、教師の命令は何事にても能く遵奉し家庭に於ては父母の命にすら從はざる事も、教師の命なれば能く之れを守ると云ふやうな時代である、故に此時を誤まらず能く境遇に順應することを得るやう良習慣を作ることが必要である。殊に自治的精神を養ひ自奮自修の主義の下に一身の事は身躬ら之れを爲さしめ、且つ自己所有權の觀念強き間に整理整頓少しも亂れざるの習慣を作らしめ、規約約束を嚴守し我意を募らず我儘を出さず自己の責任に忠實で柔順であるところの美德を養はねばならぬ。身體の方面に於ても姿勢を正し深呼吸、冷水摩擦、體操、戸外運動等其體質に應じて適當なる方法によりて身體を鍛錬し健康を增進し心身の發達を計るやう注意することが大切である。

二學年に進む頃は幾分か精神も定まり稍や空想に近きも一の理想を懷くに至りて偉人を崇拜するなど希望向上の念頻りに動くの時なればつとめて虚榮功名に流れざるやうに導き、競爭遊戯等によりて其膽力を練り卑怯未練の擧動を爲さゞる精神を養はねばならぬ。又國語、英語によりて高尚優美の思想を養ひ我國竝びに外國の社會人情等を知らしめ、殊に外國語を學ぶことによりて思考力、忍耐力を養はしめ、又學びたる事は之れを覺ゆるのみならず必ず之れを發表せしめ、講演、作文、談話、圖畫等によりて其智識を正確にせねばならぬ。教育上發表は最も主要のことなれば之を好むの時機に於て十分に發表するの習慣を作らねばならぬ、就中作文、談話の如きは日常生活上の卑近なる事より內外社會の出來事に至るまで、又は自然に接して得たる感想等凡て日々其五官を通じて入り來るところの印象を自由に發表せしめ、己れの思想を明瞭に適當に正確に表はすことを得るやう練習せしむることが大切である、又此時期に至り始めて下級生に對する義務愛情を生じ親切に之れが世話を爲して優さしき友情を養ふことを得、進んでは兩親兄弟の爲めに己れを棄てゝ奉仕する家庭的人格を養成せらるゝに至るのである。

三學年の頃より四學年の始めにかけては生理的の原因より心身上の一變化を見る時にて、從來活發なりし者も活動

表示を厭ひ頭痛を訴へ憂鬱となり、戸外に出づるよりも寧ろ机に倚り、手足を勞働せしむるよりは靜かに讀書感想に耽る等感情的個人的になり易く、讀書も論文よりも小說、美文、韻文を好み動もすれば悲觀的となるものがある。又衣服裝飾に意を注ぎ、思を凝らすやうになつて來る、かゝる傾向の表はれし場合には先きに養ひたる自然を愛する習慣を利用し、成るべく感情的の讀物を遠ざけ、自然を友とし身體を働かせて體育につとめしむると共に、一方には科學的趣味を盛んならしめ此危機より救はねばならぬ、又此時期は觀察力鋭くして批評的となり易く、父母兄姉教師上級生等の長者に對しても凡ての言行を批評の眼を以て見るやうになり、動もすれば從順の德を缺き自然放縱となりて我意を主張せんとし、若し之れを改めさせん爲めに抑壓すれば却て不平反抗を起こすなど最も注意して其教導を誤つてはならぬ、又此時代は美を愛するの念强きが故に常に美はしき思想、感情、想像を養ふやう導き、本能的衝動的に向はんとする熱情を理性によりて制することを鍛練せしめ、益々其意志を鞏固にせねばならぬ。

學校の生活より云へば四五學年生は恰も一家の主人、主婦の如く、五學年生は表面に立ちて全校の傾向、校風を作りて之れを指導するの責めに當り、四學年生は之れを補佐して裏面に働き其仕事を成就せしむるの任を負ふのである、されば四學年の時代には殊に女子として缺くべからざる奉仕の性格を養ふに好時機である、卽ち主たる人の蔭に隱れ其足らざるを助け、功は他に歸して自ら求めず靜かに修養をつとむる如き謙德を養ふの時である。五學年に至りては最上級者として全校の模範となり、指導者となるの地位に立つものなれば、自ら其責任を感ずることも深く精力を盡して其務めに當るやうになつて來るのである、從來人の爲め全體の爲めと云ふ事を十分に解し得なかったものも、己を棄てゝ級の爲めにまた全校の爲めに心を勞し、遂には中庸を失して健康を害するに至るものすらある位實に眞面目に働くのである、しかも經驗に乏しき爲めに幾度も失敗し、或は善意に出でし事も思慮足らざる爲めに行はれざる等種々の經驗をなし、玆に始めて人心統一、協力一致の困難にして己れ先づ寬容、謙遜、親切、同情の德を有す

るにあらざれば、如何に千言萬語を費やすも人を動かして之れを導くこと能はざるを悟得し、己れを知り人を知り四圍の境遇を知り活ける品性を作つてくるのである。

一度此眞面目なる境に到達する時は、本邦史によりて學びたる國民性の長短や、世界史によりて學びたる文明の變遷、治亂、興亡の原由や、自然研究によりて驚嘆せる宇宙の玄妙高遠なる祕義や、修身講話によりて欽仰せる偉大なる古今の人格等悉く自己修養の對象となり、人生の眞意義を悟り女子の責任を示され、益々自己の足らざるを自覺し、敬虔の念、向上の心こゝに生じて理想となり信仰となり精神的生命を領するに至るのである。

第六章　高等教育時代

第一節　高等教育に對する反對說

世界何れの國に於ても大學教育は元男子の爲めにのみ開かれたるものであるが、沼々として進むところの時代文明の思潮は、長く迷夢に耽つて居つた女子の頭腦に一大刺戟を與へて、女性をして自己存在を自覺の起さしめ、延いては女子の爲めにも大學教育を勃興せしむるに至つたのである、而して此の女子高等教育に對しては世界各國共に有力なる賛同者があると同時に、一方には又批難反對も少なくなかつたのである、或は女子の腦力は到底高等教育を受くるに堪へずとか、之れを授くれば女德を毀ふとか健康を害するとか、之れが爲め婚期を失ふて生涯の不幸を見るとか、種々の反對が主張せられたのである、しかし女子高等教育の實際は歐米諸國數十年間の成績と、近くば我國數年間の實驗とが如何なる結果をもたらしつゝあるかを調べて見たならば、此等の反對批難は悉く杞憂であると云ふこと

が證明せらるゝのみならず、却て其必要を認めるに至るのである。

先づ女子の腦力は果して世人の憂ふるやうに高等の教育に堪へ得ないものであらうか。米國大學の教授等の實驗によると全然好成績を收めて居るのである、時としては男子をも凌ぐものすらあるのは珍らしくないのである、勿論男女性を異にして居るところより、其學力に於ても多少長短を生じて居る、例へば男子は創始力に於て優り、女子は直覺力に於て優ることがあるも松本文學博士の云はれたる如く、元來人間の能力は特別なるものがあるのでなく、腦隨の接觸作用に基くので此接觸作用が境遇と教育とに由つて習慣をなすのである、決して男女根本的の優劣はないのである、又同博士は帝國大學或は早稲田大學の生徒に對つて說くところは、女子高等師範學校或は女子大學の生徒に於ても能く理解せらるゝのであつて、只時間の長短と說明の精粗とに相違があるばかりであると云はれて居る。米國などにては多くの鏘々たる女流學者を出だし女子大學の校長、教授等の要職に當りて其能力を發揮して居る。或反對論者は女子の專賣特許を受くる數卽ち發明品が男子のそれに比較して甚だ少數である、女子の能力は到底男子に及ばないと云ふて居る、しかし現在數に於て差があることを以て直ちに女子は高等教育を受くる能力を有つて居ないとは云はれぬ、假令少數であるにもせよ發明者を女子よりも出して居ると云ふ事實は、卽ち之れを受くる可能性があることを示したのではないか、既に此可能性を認めるならば之れを十分發展せしめねばならぬ、今日まで此數の少なかつたのは寧ろ社會の罪で、社會が女子の能力を抑壓した結果である、卽ち之れを教育しなかつた結果で積年の遺傳の然らしめたところである。

次に高等教育は女德を毀ふとの批難である、卽ち女子らしき美點を失なつて男子らしくなり生意氣になり高慢不遜になると云ふやうな批難である、しかし此等は甚だしく教育の方法を誤まつたならばいざ知らず、高等教育を授けたるが爲めに女子の性格が惡しくなると云ふことは決して無いのである、勿論男子に只盲從を事としないかも知れぬ、

玩弄物視せられて安んぜないかも知れぬが、余の實驗に徴するも教育が進むに從つて眞に謙遜の意味を解得し、他人に奉仕する美しき德性を涵養することが出來るのである。所謂自己中心なるものが段々に其影を收めて全體中心、犧牲的精神、愛國心等が形はれて來るのである、故に教育の途宜しきを得るならば決して女德を毀ふことなきのみならず、寧ろ智識の進むに伴ふて眞正の女德を發揮して來るのである。

次に高等教育は女子の健康を害するであらうか、是れ亦杞憂に過ぎないのである。前にも述べたる如く人の身體は二十五歳までは可型性を有して居る、十七歳以上に達すれば其速度は遲いが尚ほ年々發達するのである、家庭にのみ籠居して其發達を妨ぐるよりは、學校の體育によりて心身を鍛錬する方が如何ばかり健康を增進するか分らぬのである。曾て米國の一教育家が男女共學の結果を調査せるところに依れば男子の學生中病氣に罹るもの或は死亡するものゝ割合は、女學生よりも多數であつたのである、之れを見ても高等教育は女子の健康を害すると云ふことは據のないことである、勿論過度に不愉快な學問をすれば其健康を害すること男女の別はないのである。

次に女子に高等教育を授くれば婚期を失し一生を不幸に陷らしむと云ふ批難は、實は女子の心身發達又は世の進歩の趨勢を知らずして、徒らに舊來の習慣に拘泥束縛せられたる議論に過ぎないのである、我女子大學の生徒が卒業するのは滿二十歳の時である、之れを高等女學校の卒業に比ぶれば三年の後である、高等女學校を卒業して直ちに結婚するものは左程多數ではないのみならず、女子身體の發育智能の圓熟から考へてもかゝる早婚の弊は漸々改めて行かねばならぬと思ふのである。凡ての動物を見ても下等劣等のもの程早く成熟するのである、人類でも開化の程度低きもの程早く結婚し、文明人程成熟する期間が長いのである。如今我國に於ても男子の結婚時期は段々に後れて來て居る、女子も亦社會の進歩に適應し得らるゝだけの準備が必要になり從つて年月を要するのが當然のことである、決して婚期の後れるのではない、此相當の年齡に改めるのである、是れ内部の發達上から見るも外部の境遇上より考へて

も最も適當なる時期である。

第二節　高等教育の必要

上來述べたる如く女子高等教育に對する反對批難は啻に其理由なきのみならず、更らに進みて大に其の必要を認めるのである。先づ教育上より考ふるも女子が高等女學校卒業の後尚三四年の間は其心身の發達が盛んなので就中神經系統の發達は頗る著しいのである、若し此時期に於て教育を中止せんか將來大に發達せらるべき諸能力も自から其進歩を停めるのである、而して今後日進の社會に適應すべき良妻賢母として高等女學校だけの教育にては十分に其重任を盡すことが出來るのであらうか、今日中等教育に從事して居る教育家の意見を開きても多くはそれ以上の教育の必要を認めて居るのである。未だ成長發達の時期に在る女子が出來るだけ多くの高等教育を受くることは啻に彼等自己の幸福のみならず、實に國家社會の爲めに必要なることである。

又國家社會の發展進歩の上より考へても、女子高等教育の緊切なることを感ずるのである。抑も國家の一半は女子によりて組織せられ國家は卽ち男女の複本位によりて成立して居るのである、されば國家の發展と云ふ言葉の中より女子を除外して考ふることは出來ぬ、國民としての職分は女子も共に負擔せねばならぬのである、而して國家の進歩は卽ち進歩せる國民の增加に伴ふて其實が擧がるので、獨り男子のみが如何に進歩したりとて、女子にして時勢に後れ智識も品格も進まなかつたならば健全なる進歩を見ることが出來ないのである、女子も亦進歩せる國民の資格を全ふせんが爲めに、高等教育を受くるの必要あることは、必然の勢であると云はねばならぬ。次に家庭に於ける女子、卽ち妻として、母として、主婦としての女子の天職より見るも益々高等教育の必要を感ぜざるを得ないのである、云ふまでもなく人生の慰安、平和、安寧は家庭によりて得られ、新しき元氣も活動の勢力も家庭によりて生ずるのであ

る、此家庭を調和整理するのは女子の最も重き職務である。然るに教育の進歩は智識感情趣味の程度を漸次に高尚ならしむるのであつて、其程度の著しき不平均は自から調和を破り離隔を生ずる原因となるのである、殊に今日の如き新舊思想の過渡時代に在ては能く境遇に順應して調和を計るの必要より、進歩したる智識と實力と品性を備へたる女子を要するのである、或は子女を教育する母としての責任から考へても一層其必要を認めるのである、單に子女の身體を健全に發育すると云ふに止まらず、其智識を啓發し其德性を涵養し其特徴を認識し、第二の國民として將來の社會に適應すべき品性習慣を養成することが出來るならば、獨りの一家の幸福のみならず國家の發達に如何程の速度を加へるか計られないであると思ふ。

今や世界の大勢はかくの如き必要に促がされて、一般に女子の智識技藝を進め其品性を高めんことをつとめつゝある、久しく保守的の態度をとつて居た獨逸ですら女子の爲めに大學の門戸を開放して來たやうに、我國のみ獨り此趨勢の外に立つことは出來ないのである。

されば我國現今の情態に於て如何なる教育を施こすべきやは、次に起つて來る問題で大に研究を要するところである。歐米諸國に於ては特に女子の爲めに數多の大學を設け、或は男子の大學を女子の爲めに開放して居る。しかし直ちに之を我國に移して模倣することは決して當を得たるものではない。如何となれば我國女子發達の歴史、現在の實狀及び國家社會の狀態は歐米諸國のそれと大に其趣を異にして居るのである、廣く外國の長を取って我短を補ふべきは勿論であるが、宜しく最も我國の實際に適切なる制度をとらねばならぬのである。

さて高等教育の機關として普通大學教育と專門大學教育との二方面あることを知らねばならぬ、卽ち一は人格養成を主眼とし、之れを全ふする爲め諸能力を發展せしめ眞の自由を得たる女子を作るを以つて目的とするのである、一つは職業的專門的の學術技藝を授けて之れを以つて獨立自營の計を爲さしめ、或は家庭社會の改良進歩の爲めに働く

ことの出來る素養を與ふるのである、然れども專門教育の中に人格教育の要素を離すこと能はざるが如く、普通大學教育に於ても亦專門的教育を施こして其可能性を發展せしむることは人格養成の上に缺くべからざることである。我國今日の趨勢は漸次に女子の專門教育を促進せしめて居るのであるが、普通大學教育の機關は尙一層其急要を認めて居るのである。日本女子大學校の如きは卽ち此時代の要求に應じたる本那最初の女子高等教育機關であつて、普通、專門の兩要素を參酌して組織して居るのである。

第三節　普通大學教育

先づ此時期に於ける女子心身の狀態を觀察するに、一般女子は生理的方面に於ては此時代に當り著しく發達するのは神經系統の機能が複雜になるのと、生殖系統の機能が發達するとの二つである、此發達を見ると共に身長、體重、骨格其他凡ての器官が女子として一定の型を現はすのである。女子特有の定型とはどんなことをさして云ふかといふに、一般に優美に發達して來るのである、是れは女子の骨格が細く華奢であるところから原因して居るが上に、筋肉は脂肪によりて包まれ、全體が曲線的で皮膚に光澤を帶びて來るのである。尙女子を男子に比ぶれば骨盤か著しく發達する爲に腰部が大となり、重心は下になり運動は緩慢となつて靜坐の仕事に適するやうになつて來るのである。

かくの如く身體の變化を生ずると共に精神にも亦一定の變化を來たすのである。今智、情、意の三方面より之を見るに、智的作用中主なる作用は單純なる表象作用よりも表象相互の關係を認むる思想作用が盛んに起つて來るのである、故に思想の時代とも云ふべき時である、從つて科學、論理學、哲學、社會學、語學等の抽象的原理を理解し得るやうになつて來るので、一方には之に伴ふ疑問百出常に懷疑の心を起し、其結果煩悶厭世に陷り易くなるのである、尙ほ此時代に於ける男女を比較すれば男子は主に概括的である、女子は概括した智識の方は比較的に不得手で分解的

のものが得意である、卽ち觀念が多く働く傾向を有つて居るのである。かゝる差異は多少幼少の時より兆して居るのであるが、青年期に至つて殊に著しくなつて來るのである。

又此時期に於ける感情は啻に情緒が盛んになるのみならず、進んで情操の發達活動が益々旺盛となるのである。如何となれば情操は概念に伴ふて起るところの情であり、概念は思想作用の結果として出來るのであるから、思想と情操とは相伴ふのである、故に此時代に於て始めて眞善美を理解し、之れを欲求し欽慕すること尤も激しく、從つて宗教心の如きも著しく明確に表はれるのである。女子は情の方面が最も長所とするところであつて愛情は其生命である如く云はれて居る位である、しかし女子の愛情は强く狹く具體的になる傾向を有するのである。

以上の如く思想に於て感情に於て殆ど常に過度に働く時代であるが故に、其考へたるところは頻りに之れを實現してやろうとして、意志の活動が又甚しく盛んに起るのである、されど未だ其思想の練られざるが爲め又餘り其情緒が盛んなる爲め、之れを實現する方法手段に至つては誤まる事が少なからぬのである、從つて犧牲的精神も起れば名譽心も强いのである、此等の結果が種々なる物事を組織し計畫を立てるのであるが之れがまた生涯の過失を釀す基となることもあるのである。

要するに此時代は人生航路の最も險惡なる時である、教育者たるものは大に注意して正確なる羅針盤を與へて安全なる航路をとらしめなければならぬ、卽ち激烈なる情緒を善き方向に導き、智識を授くるにも注入的を避けて常に自發的に、靜的態度を退けて常に動的態度たらしめ、以て自奮自修の精神を鍛練して健全なる發達を遂げしめねばならぬ。

前述の如き心身の狀態にある女子を教育するには、先づ第一に凡の活動を自動的にせしむると云ふことゝ、第二にそれに對する設備とが必要である。自動的活動を爲さしむると云ふことは初等中等の教育時代に於ても緊要なる方針

で度々述べたるところであるが、此時代に於ては一層深く此精神を鼓舞奬勵して他日獨立自營し或は一致協力して一社會を作り得る基礎を學ばしめ以て眞の大學生活を送らしめねばならぬ。女子心身の發達より見るも此時代になると凡て自動的精神が盛んになるので、之れを適當に指導して活動を自由ならしめ完全なる發達を促がす必要があるのである、故に此時代に於ては萬事命令を下してなさしめず、單に善き暗示を與ふるを以て足るのである常に生徒をして自ら考究し自ら構成し而して自ら之れを行はしむ、かくすれば彼等は非常に興味と責任をもつて其修養に學問に將た學理の應用、境遇の改善に力を用ゐ、互に切瑳し琢磨して各自の品性學力を進むることが出來るのである、又互に其責任を分ちて分業的に研究せしめ、相扶掖して團體生活の完全を計らしめねばならぬ。前章に於て述べたる如く日本女子大學校に於ては此方法を取り整理、衛生、體育、農藝、文藝、實驗、經濟、傾向等の諸係を設け、生徒をして各々之れを分擔せしめ、相議し相扶け凡ての計畫組織を立て、以て大學生活の完全を計つて居るのである、かくして各自の自動的活動が盛んになり又其機關が備はるに至れば、生徒は次第に一社會を組織して自ら治むるの團體的生命を生み、感化制裁の勢力を作り、健全なる校風を醸成するのである、卽ち何人も動かすことの出來ぬ堅固なる社會的精神が生じて來るのである。

此の如く生徒をして學問に修養に自治的精神を發揮せしむるには、之れに對する設備と境遇の完備に俟たねばならぬ。從來學校なるものは單に學問を修むるところとして學校的要素のみにて存在し、實際の社會家庭とは動もすれば疎隔して居つたのである、しかし今後の女子教育にはどうしても此等の連絡を一層密接ならしめ、學校內に社會的要素も家庭的要素も加へて其理想的關係を實現して行かねばならぬのである。卽ち學校的要素としては圖書館、實驗室、參考室等を設備し家庭的要素としては完全なる寮舍を設備し、社會的要素としては商業部、園藝部、牧畜部若くは共同購買會等の如き機關を設くることが必要有效であることは既に前章に於て縷述したるところである。

第四節　科學的教育

先きに教育上の三大綱として擧げたる科學的教育、國家的經濟的教育及び道德的教育の方針は、大學教育に至つて益々之れが貫徹を期せねばならぬ、何となれば學校教育は最早此時代を以て終りを告げ、卒業後は家庭に入り社會に出で各其天職に從つて實地の働きに就き、之れよりして教育の效果が實際に現はれて來るのであるからである。

近來物質上の事は勿論思想上の事にも大に科學的研究行はるゝやうになり、從來科學とは何等の交渉なきものと考へられたる宗教や文學の如きものも科學的智識を要するやうになつて來たので、況して物質界の事は日一日と其研究應用の範圍を擴めて商工業發達の原動力となつて居るのである。米國の富源盡くるところなきが如きも素より土地自然に負ふところ莫大なるは勿論なるも、一方に之れを開拓し得る能力なからんか、單に寶の持ち腐れとなるに過ぎないのである、米國の國民が教育に熱心に學術を隆興せしめ、發明發見を奬勵して科學的研究を實際の事業に應用することに鋭意なるは、やがて商工業の隆盛を來たして居る所以である。

我國に於ても維新以後歐米の思潮文明は滔々として浸入し來り、教育學術の進歩は商業に工業に將た鑛業に殆ど其面目を一新せしとは云へ、未だ其日の淺きが爲め多くは模倣を事として創見發明の少きことは蓋し止むを得ないので、大に國民の發奮を要するところである、しかるに我國の女子が科學的智識の乏しき爲め迷信に陷り進取の氣慨なく、徒らに不生產的生活に安んじて居るのは國家の爲め直接間接に幾何の損耗を來たして居るであらうか、國家の發展上第二國民の養成上女子に科學的教育の普及を計るは最も急務なることである、而して高等女學校の教育にては十分に其效果を見ること能はざるは過去の歷史の明かに教へて居るところである。

抑も科學の教育は實物實驗の學問である、自ら觀察して以て原因結果を明かにし其原理を發見して之れを實生活の

上に應用せざれば何等の益するところは無いのである。兎角女子の頭腦は依賴的習慣に馴致せられ、只教師の講議を聞き或ひは書籍を讀むのみ、自ら研究し實驗するの精神甚だ乏しく、從つて其智識は至つて空漠にして實地の役に立つ事が少ないのである、故につとめて自動的研究の態度を取らしめて確實なる智識を得せしめ、一方には其學理應用の道を講ぜしめねばならぬ、或は日常の生活に或は教育上に或は社會上に或は思想上に其原理を應用して行くやうにならねばならぬのである。例へば數學、理化學等は之れを手工教育又は家庭改善の爲めに應用するとか、生理衛生は之れを身體的教育の上に活用するとか、動、植、鑛物學は之れを園藝、農藝等に實用するとか、或は此等の研究により見出したる原理法則を推及して機械器具の改良發見を工夫するとか、若くは精神修業の上に應用して日常生活上起るところの事物を判斷し正確公平なる行爲を營む等、其智識が性格の中に醇化し活動してゆくやう教育するのが科學的教育の目的であるのである。

第五節　國家的經濟的教育

勞働を耻ぢ實業を賤しむるの積習を改め、經濟的品性を養成して大に商工業の發達を計るのは我國刻下の急務であることは度々述べたるところである、女子の教育に於て此品性確立をつとめ家庭の氣風を一變するは此國是を遂行する第一着歩である。初等教育に於て其萠芽を作り、中等教育に於て之れを培養し、更に高等教育に於て其花を咲かせ、卒業後の生活に於て其實を結ばしめねばならぬのである、故に高等教育時代に當りては從來の教育を完ふして其智能を活動せしむるやう導かねばならぬ。第一科學的教育により其頭腦を正確質實ならしむることが必要である、第二專門的の教育を授けて獨立自營の道を講ずる素養を備へさせることが必要である、第三には經濟的社會關係を學ばしめて實際の世態に通ぜしむることが必要である。科學的智識の養成に就ては既に前項に於て論じて置いたのであ

る、女子に專門的教育を授くるは從來特別の場合を除く外は單に萬一の變に處する道として考へて居つたのであるが、現今の如く生存競爭の烈しき時勢に當りては、女子といへども其性質境遇を考へ最も適する專門の教育を授け、國家の富强子孫の幸福の爲め貢献せしめなければならぬ。經濟的社會關係を學ばしめんとするには、是亦既に述べたる如く經濟的機關を學校に設備し彼等の頭腦に不斷の印象を與へ、之れを自動的に反應せしむることが必要である、卽ち商業部、銀行部の如きものによりて金融機關、商業の實際を學ばしめ、牧畜園藝によりて家庭に於ける副業の暗示を與へ、或は購買組合の如きものによりて組合合同の組織を知らしめ、且つ此等の機關を自動的に利用して他日婦人合同事業の智識を養はしめ、以て經濟的品性の素地を作らしめねばならぬ。

第六節　道德的教育

高等女學校時代に於ては凡てが未だ他律的に傾いて居るのであるが、大學教育を受くる時代となると凡てが自律的になるので、道德の方面にもかゝる傾向が現はれて來るのである、例へば自由を望みて束縛を厭ひ極端を好みて中庸を平凡視し、宇宙の不可解を稱へて悲觀に陷る等不健全なる思想に謬まられ易いのである、されども此時代の教導宜しきを得て始めて自ら理想を畫き主義を立て、之れによりて日々の行爲を律し、他日世の爲め人の爲めに盡すべき人格の基礎を確立することが出來るのである。

されば此時代に於ては最早普通一般の形式的道德には滿足し能はざるやうになり、深く道德の根本に立ち入り、宗教の如き深刻なる思想に觸れざれば、到底滿足することが出來ぬのである、何等か眞理を自覺し得る主義を見出さんと求むるのである、故に多くの者は社會的關係に就き、或は宇宙自然の美妙祕義に心を奪はれ、疑問連りに生じて其日常の任務をも疎かにするに至る如きことがある、彼等は饑へ渴くが如く常に何物かを慕ふのである、かゝる青年の

饑渇を救ふものは何であろうか、かゝる心奥に潜める欲求を滿足せしむるものは果して何であらうか、在來の宗派的宗教は何等の矛盾をも起さずして確固不拔の信仰を與へ、眞に安心立命の地を見出さしむることが出來るであらうか、否々此等は決して彼等を服從せしむる權威を有たぬのである。彼等は既に高等の教育を受け相當の理性を有して居るのである、其理性に訴へて或る程度までは了解することが出來るものでなければならぬ、卽ち科學哲學の基礎を有し、更らに各宗派的宗教の眞髓を萃め時代文明の思潮に融合せる、否之れを導くところの一大勢力、一大意志或は一大眞理に觸れたるところの信仰にあらざれば決して眞の滿足を與ふることが出來ぬのである、徒らに高遠なる言葉を弄するの嫌あれども我々の經驗によれば此至境に造詣して、之れを日常生活の上に實踐躬行することにより始めて安心をなし得るのである。かゝる意味に於て我々は少なくとも大學教育に於て道德教育は、廣義の宗教教育にまで到達せざれば其效果の無きことを信ずるものである。

而してかゝる信仰を得せしむるには各部專門の學科を土臺とし、例へば文學を學ぶものは文學の方面より科學を學ぶものは科學の方面より、各々信仰の道に入りて智的統一を爲し、進んで自己の裏に眞の精神的生命を見出さしむるのである、斯る總合統一の働きに就き大なる暗示を與ふるのは實踐倫理學である、之れが中心となつて生命を產み出すのである、かくの如き實踐倫理學を學ぶと共に一方には高大なる人格に接せしめ、或は偉大なる自然に觸れしめて、益々彼等の靈性を純美高潔ならしめねばならぬ。

かくして個人的精神教育の印象を與ふると同時に、一面團體的に修養せしめて日常の行爲に就き或は信仰狀態、思想狀態に就き其經驗を交換し、又は相互に深刻なる忠告をなし以て品性を陶冶せしむることが大切である。其結果は團體的生命を生じて和氣靄々たる間に犯すべからざる制裁力を有し、各自を反省、努力、克己、奮勵に導くことが出來、從つて始めて自己中心の範圍を脫して全體に奉仕し、若し其主義信仰のためならば如何なる困難にも耐へ如何な

る辛苦をも辭せざるに至るのである。

以上は主として精神的方面であるが一方日常生活に於ても所謂常識的方面を缺いてはならぬのである、之れは寮舍等の境遇を利用して其異なるところの學問趣味を交換せしめ、專門に偏倚することなく、圓滿多趣味の性格を養ふことをつとめさせねばならぬ。寮舍は又修養の爲めに最も大切なる場所である、人の品性は飲食起臥の間に最も明らかに現はるゝものである、此間に於て眞に品性の進みしや否やは自己自らも寮生相互の間に於ても能く知り合ふことが出來るのである。故に寮舍は僞りなき眞率なる修養をなさしむることが出來る最適の境遇である。

要するに大學程度に於ける道德的教育は其根底を深く精神界に置き、確固たる信仰を得せしめ、其主義信仰の下に日常の行爲を律して、以て自主自由の良習慣を養はしめて此目的を達せんとするのである。

第七節　專門大學教育

專門教育は女子の智識の進歩と其特性趣味の發達に伴ふて生ずる自然の欲求よりと、一面には社會の生存競爭日に劇甚となるに從ひ、生活問題、經濟問題の壓迫により早晩益々盛んになつて來るのは明かなる趨勢である、現今專門教育の狀態は尙未だ一進一退の間に在りとは云へ、女子に高等專門の學術技藝を授け、教師となるの資格を得せしめ、或は職業に就くの準備をなさしめ、其教育の結果として女子をして直ちに自營の道を得せしむるのである、假令自營の必要なきものも家庭の教育、社會的事業の爲めに力ある働きを爲し、家庭社會の進歩改善に少なからざる貢獻をなして居ることは明かなる事實である。

然れども從來の專門教育は、卽ち其名目のとほり、專門的であり職業的であるところより、兎角人格教育を輕視せる傾きがあつて、動もすれば職人的藝人的に陷り易く、又徒らに形式的機械的に流るゝ弊風がある、此等は皆教育の

方法が至らざる結果で今後大に改善して行かねばならぬところである。卽ち自動的教育の方針を取り自ら實驗し自ら工夫し自ら研究するの態度と習慣を作り、啻に學術技藝に秀づるのみならず、高尙なる理想と人格を養ひ且つ働き且つ進むところの人物を養成せねばならぬのである、故に科學的教育及び國家的經濟的教育は專門教育の要素として缺くべからざるは云ふまでもなきことなるが、其道德教育を完全にし機械的物質的に傾き易い弊風を救ひ、其能力と智識とを社會國家の爲めに有益に働かせるところの精神理想を涵養せねばならぬのである。

專門教育に就ては尙多く論述したいこともあるが今は其必要と大體の方針とに止め、終りに專門教育を受くるに當り注意すべき二三の要件を述べて置く。

先づ第一に考へなければならぬことは社會の必要、時勢の要求である、如何に自己の欲するところなりとは云へ、全く社會と沒交涉では何等の效果をも擧げることが出來ない、又如何なる順應も改善も計ることは不可能である、故に其時代の趨勢を察し之に適應し得るものを選擇しなければならぬ。第二に必要なるは自己の特殊性である、例へば音樂に適する者が科學を修めては十分なる發達を見ることが出來ない、其人に正しく適したるものでなければ成效が困難である、自然が美妙なる調和をなして發達するのは各自自己の分を守つて居るからである、故に徒らに流行を追ひ世俗に倣ひて選擇の愼重を缺いたならば、後日とりかへしのつかぬ不幸を來たすのみならず却て社會の無用物となるのである。第三には自己の境遇を知ることである、己れを發展しむる境遇あつて其目的を遂ぐることが出來るのである、如何に理想は遠大なるも將來の希望は盛んなるも、自己の境遇自由ならざれば、之れを達すること能はざることが多いのである。故に教育者たるものは未だ十分の自信なき靑年、子女の專門學選擇に就ては、社會の情勢と個人の性能境遇を察して適當の指導を與へねばならぬ。

第七章　卒業後の生活

第一節　教育を受けたる女子の覺悟

學校卒業後の生活は云ふまでもなく或は家庭に入り、或は社會に出で、各天職に從つて其本分を盡すべき時期が來たので、社會も亦其一員として之れを認め責任を求めるやうになり、始めて獨立の資格を得て所謂一人前の人間となつたのである。從來父母の膝下に在りて保護せられ教育せられたるものが、一變して新たなる家庭に入り、自ら夫を助け子女を教育すべき任務に當るやうになり、或は被教育者の地位に在りたるものが、一轉して教育者の地位に立つやうになつたのである。しかしながら教育の見地から云ふと學校は決して教育の終りではない、一度校門を出づれば教育の完成を告げたものと思ふのは大なる誤りである、つまり今後は能動的に自ら自己を教育して行かねばならぬやうになつたので、若し學校の教育を以て自ら滿足し、智識も品性も完全に修養が出來たものと思ふならば、其時より智識は停滯し品性も發達せざるのみか、却て年處を經るに從つて退歩し生氣を失つて來るのである。

今日我國の教育を受けたる女子の狀態を見るに、多くは學校生活時代に比して進歩の精神なく向上の氣慨なく、しかも虚榮名利の奴隷となり、獨立の心乏しく責任の念鈍くして只だ何事も他に依賴するの舊態を脱せず、妻として、母として十分其任務を盡すこと能はず家庭の改善は得て望むべからず、教育の效果は何處にか之れを求めんと云ふのが一般の狀態であるに拘はらず、積年の陋習社會に浸潤して男子も之れを怪まず女子も亦之れに安んじて居るのである。

東洋の孤島に長夜の夢を貪り、桃源の仙郷として超然世外に立ちたる時代ならばいざしらず、苟も文明の潮流に棹さし世界の競爭場裡に馳聘するに至りたる今日は、女子といへども國家の發展進歩に其責を分たねばならぬことは、職者を待ちて後に知るべきことではない。

男子は須らく國家の一半たる女子の覺醒に待たねばならぬ、女子は須らく其位地を自覺せねばならぬ、教育あるところの女子は此革命の急先鋒とならねばならぬのである。

されば如何にして女子の面目を改め學校教育の效果を完全に發揮せしむることが出來るであらうか、余は今之れを研究的生活、經濟的生活及び精神的道德的生活の三方面より考察して、學校卒業後の生活に於て、尙自ら教育し向上してゆく精神と活動とを奬勵したいと思ふのである。

第二節　研究的生活

人類が他の動物に異なるところは「甲は境遇を支配し乙は境遇に支配せらる」との格言に盡して居る。此人類の特徵なる境遇を支配すると云ふことは何によりて出來るかと云ふに、卽ち人類は研究的生活を營むことが出來るからである、自然の現象より社會の事變に至るまで其原因結果を觀察研究して、利益あるものは之れを發達させ、不利なるものは之れを除き或は之れを防いで行くのが研究的生活であつて、人類の進歩は此研究的生活の結果である。

されば研究は人生の進歩である、研究なき生活は段々時勢に後れるところの生活である由來研究とか學問とかは實際生活とは離れたものゝやうに考へられて居つた爲め、學校卒業後の生活に於ては其學びたる智識を應用して事々物々を研究することなく、凡て從來社會に存在せる習慣風俗に從ひて徒らに事物を反覆するのみ、改良を計り進歩を計る精神は極めて薄弱であると云ふことは我婦人界に於ける一般の通患である。

世の中は日を追ふて生存競爭が激烈となり、男子は全力を傾倒して外に働き、殆んど内を顧みるの暇はない、女子が内助者たる任務を全ふすべきは云ふまでもなく、教育事業や社會事業に其力を盡さねばならぬことが、益々加はつてくるのは避くべからざる、社會の趨勢である、女子が研究的精神を盛んにし、先づ自からを進め、家庭を進め、社會を進め、國家を進めて行くやう努力することは今日の急務であり、また其責任である、今女子に最も關係深き家庭、教育、社會の三方面に於ける研究の必要に就て述べて見たいと思ふ。

元來家庭は保守的思想の支配するところである、殊に我國に於ては最も保守的傾向があつて家風慣例は殆ど神聖視せられて容易に變易することを許されない、勿論改革なるものは何事にても十分其利害得失を考量して後に實行すべきことで、徒らに他を模倣したり物好に輕卒に妄斷すべきことではない、しかしながら善事と知りつつ家風に拘つらひて之れを用ゐることを躊躇すべきではない、惡事と知りつゝ慣例に縛せられて之れを改むることを逡巡すべきではない、要は時勢に順應して其最も宜しきに從ふべきである。維新以來我國の社會は長足の進歩を來たせるに拘はらず、仔細に觀察すれば家庭生活の上にはよし多少の變化を見るも果してどれだけの進歩を來たして居るであらうか。明六つとか暮六つとか云ふて僅かに寺の鐘を便りにして居つた昔と、精巧なる時計を以て分秒を知ることの出來る今日と、家庭の仕事の上に如何なる變化を見ることが出來やうか、多くの家庭は未だ時間を愛惜するの念に乏しく優々閑々無益の時間を浪費して居る有樣である。兒童教育の研究はいくら進んで來ても家庭に於ては祖父母傳來の舊慣が依然として行はれて居る、かくの如く衣食住、衛生、經濟、育兒、社交、家庭、道德、家庭の趣味等、家庭生活の内容に就て今日までの教育が果してどれだけの效果を現して居るであらうかと觀察して見ると、十分に改善進歩の迹が認められないのみならず、將來益々改善進歩して行かねばならぬ多くの事柄がある、今日のやうに女子が保守因循であつたならば何れの日にか舊態を改むることが出來やうか、どうしても研究的精神を盛んならしめて家庭の改善進歩

を計らねばならぬ、而して其責任は一に女子の肩上に繫がつて居るのである。次に教育の研究である、子女の、教育は學校と家庭と相俟つて始めて完全なる結果を見ることが出來るので、教育は學校に任かせて置けばよい如く考へてはならぬ、家庭に於ても十分子女の教育に注意し學校と歩調を一にして其完成を圖らねばならぬ、母たるものが、教育上の智識に乏しかつたならば、子女の智能の開發を妨げ品性の訓練を誤まることが少なくないので、第二國民の母として教育の研究は國家に對する義務である、或は子女發育の狀態性質の如何を考へ或は社會の潮流國家の要求を慮ぱかり最も子女に適したる教育を授くるやう心懸ねばならぬ、學校と家庭との連絡が兎角其實效を見ることの困難なるは、家庭なり母なりの教育研究の精神が足りないからである、或は父兄會とか或は母姉會とか兩者の連絡機關は何處の學校にも設けてある、かゝる會合を利用して教育家と協力して教育の方針や實際を研究することは極めて有益なることである。英國等にては婦人が學校の學務委員となり、學校教育の方針から經濟のことに至るまで責任を以て擔任して居る例が少なくない、或は學校教師の爲め專門の大家を招きて講演會等を開催し、大に教育の發達を助けて居る、我國の女子もかゝる教育上の趣味と精神とをもつやうに進まなければならぬ。

一般の教育に就てもさうであるが殊に女子教育の研究は女子自ら之れに當り適切健全なる發達を計らねばならぬ、米國の女子教育の盛んなるは主として女子自身が努力奮鬪した結果である我國に於ては女子教育の輿論を起すものは重に男子であつて、女子は却て手を拱ねて傍觀して居る有樣である、どうしても女子が覺醒して自身の教育を研究し其發達を計るやうにならねばならぬ。

終りに社會の研究に就て云はんに、女子も社會の一員である以上は、社會の性質なり趨勢なり現狀なり又如何に之れを改善すべきや等の問題は常に觀察研究して居らねばならぬ。社會の何たるかを知らざれば之れに適應してゆくことも出來ないので之れが爲めに自己の幸福を失ひ家庭の和樂を妨げ社會の調和を破ることは少なからぬことである、

此弊を救う爲めには是非女子も社會を研究して其實情を知り又其間に行はれて居るところの社會意志を知ることが必要である、彼の風俗改良や慈善救濟や其他親睦交際やに關する種々の團體が組織せられて居るのは、兎も角女子が社會の一方面に着眼して、之れを研究せんと企てゝ居るのである、かくの如き女子の活動は益々發達させて行かねばならぬ、而して之れが健全なる發達をなして社會の福祉を增進して行くには、つとめて虛榮僞善の弊を戒しめ、眞率質實の精神をもつて之れに當らねばならぬのである。

要するに研究的生活とは向上進歩の一路であつて、教育を受けたる女子が自己に對し家庭に對し社會に對して當然盡すべき責任である。言ひ換へれば教育ある女子は徒らに安逸苟且の生活に安んぜず、居常力の許す限り家庭なり教育なり社會なりの事象を研究して、之れが發達進歩を計り、人生の幸福を增進するの責任あるを云ふのである、之れがまた自己及び自己の子孫が社會の恩惠に浴する原因となるのである。

第三節　經濟的生活

我國の女子に經濟的思想と能力の缺乏して居るのは甚だ悲しむべきことである、女子は一般に消費者たることは其職分上怪しむを要せざるところであるが、しかも男子が額に汗して働きたる收入を無益に消費し、有害に消費して顧みないのは、我々の屢々見るところの事實で、家庭の不和もこゝに原因して居ることが多いのである。女子が經濟的能力を有たない爲めに不相應なる物質的欲望を起こし、自らは之れを滿足せしむる道を知らず、只男子のみ依賴して之れを求めるのである、而して其欲望を滿たすこと能はざる時は忽ちにして不平となり不滿となり煩悶となり、遂にヒステリーに罹ると云ふ有樣で、家庭は常に不愉快不健全にして其影響は子女に及び生涯悲運に陷るのは世上幾多の例があることである。

凡そ力の有らん限り相當な働きを爲し、其働き相當の生活を營なむと云ふことが道德上より見るも經濟上より考ふるも至當の事で、誰人も守るべき原則である。經濟の要素は勞働と分配と消費の三者によりて成立して居る、力の限り働くのは、卽ち勞働でかく働けば相當なる分配を受くべき筈である、分配を受けた結果は相當なる生活卽ち消費をすると云ふことになる、女子は素より何れの要素にも關係を有して居るのであるが、殊に關係の深きは消費である、此消費の方面に當つて女子が困難を感じ又多く失敗するのは、其虛榮心を抑制すること能はざる爲め、或は如何に消費すべきかゞ分らぬため、無益に財を費やして所謂相當の生活を營なむことが出來ないからである、或る意味より云へば生產或は勞働は消費の爲めであると云ひ得べきやうに消費と云ふことは頗る大切な問題である、巨萬の富を造ることは素より困難なる事であるが如何に之れを消費すべきかは更らに困難なる問題である。動物の如きは自己の身體に必要なるだけの食物を得て調理もせず作法もなく裝飾も要せず其儘之を食してそれですむのである、人間は決してさうはゆかぬ、種々なる社會關係の下に唯必要なるものを取ればよいと云ふことは出來ぬ、有る限りの智力を用ゐて最も適當に有益に趣味あるやうに消費せねばならぬ、卽ち自己の進步にも社會の文明にも資するところがあるやうに消費せねばならぬのである、昔は衣食を節減するのを以て消費の最上の方法として考へて居つた、今は積極的に其資力相當に最も適當に衣食し消費するのが消費の理想である。生產上に最小勞力を以て最大結果を求むるやうに、最小財力を消費して最大有效ならしむることが出來ねばならぬ、必要なる器具をも使用せずに儉約するよりは、より便利なる器具を成るべく廉價に製作して使用し、無益の手間を省くやうにするのが巧みなる消費の方法である。

故に適當なる消費を爲すには、第一自己の分を知ることが必要である、分を知ると云ふことは自己の社會に於ける地位を誤りなく知ることで、社會の全體の關係がよく了解されねばならぬ、第二に最小の消費を以て最大の效果を見るには智識の應用を敏活にし、新たなる工夫發明を利用して行かねばならぬ、第三には能く社會經濟の現狀に通曉し

て之れに順應し、協同の力を藉りて利益を分たねばならぬ、例へば消費組合、購買組合の如き組織を利用することである。

最後に經濟的生活に必要なることは女子も相當なる生產的勞働をなすべきことである、我國中流以上の家庭に於ては勞働を賤しめ手工と卑しむるの舊習を脫せず、徒らに無爲安逸の生活を喜ぶの風あるは啻に經濟的損耗の大なるのみならず、國民の氣風を萎微せしむるの原因である。無爲安逸の生活は浮華怠惰の風習を生じ、勞働工作は質實勤勉の氣象を養ひ、經濟的品性を育てゝ來るのである、畏くも我　皇后陛下は親しく養蠶を試みさせ玉ひ、手づから繃帶を製し玉ふと漏れ承るのである、臣民の仰ひで倣ひ奉るべき模範である、假令境遇上必要を感ぜざるものも徒手遊食するは恥づべき生活であると云ふことを悟らぬばならぬのである。而して今や凡ての事業が悉く分業となつて來た結果、女子に適する仕事は幾らでも與へられて居る、能く販賣組合、信用組合等の組織を利用して女子の副業を奬勵してゆく時は、經濟的思想と能力を發達せしめて家庭の經濟力を增進せしむることを得るのみならず、延いては國家富强の基となるのである。

第四節　道德的精神的生活

道德的精神的生活は人間生活の基礎にして複雜なる社會關係の宜しきを保つてゆく道である、智も富も道德的精神主義信仰の支配を受けて始めて自己を幸ひし、社會を益することが出來るので、人間の尊ぶべき價値の土臺はこゝに存するのである、されば道德的精神の修養につとむるは人間の生涯を通じて一日も惚がせにすべからざる大切の要件である、而して此道德的精神は獨立自主決して他より犯されてはならぬものである、例へば女子の美德の主位に置かれてある從順の德の如きも、唯他人の命之れ從ふのが眞の從順ではない、自ら進んで他人の中に善を認め眞を認めて

之れに奉仕するのである、自己に精神なく主義なきものは何を以て他人の精神主義を判斷することが出來やうか、只盲從あるのみである。女子が虛榮に悶へ同情が姑息に陷るなどは皆一定の精神主義なき爲め一時の感情に左右せられて動くのである。或は習慣風俗に支配され是非を判斷することが出來ないからである。かくの如く自ら己れを支配することの出來ざるものが、どうして他人に奉仕して其眞善に一致融合して眞に從順の美德を發揮することが出來やうか、精神修養の忽にすべからざること論ずるまでもないことである。

而して精神修養の爲め是非知らなければならぬことが三つある、それは先づ第一に自己を知り、第二に社會を知り、第三に宇宙を知ることである。

自己を知るとは如何なることであるか、人誰か俯仰天地に恥ぢざる心をたもち、自ら自己を尊敬することの出來るやうに希はざるものがあらうか、又人の最も苦しむことは自ら己れの罪を感じたる時である、此心象は自から自己を客觀視することが出來るから生ずるのである。學校教育時代教師が道德的訓練に於て最も務むるところは生徒をして自己を知らしむることである、しかしながら最も能く自己を知ることの出來るのは社會に出でゝ其天職に就いた時である、社會の活ける事物に觸れ其複雜なる關係に接する毎に自己の何たるかは明かになつて來るのである、一度自己を知ることが出來たならば、一部分的自己卽ち一時的感情に支配せらるゝことなく、眞に自己を統御することが出來るのである。

自己を統御するは何の爲めかと云へば社會に其自己を以て奉仕せんが爲めである、家族も一の社會であり國家も世界も一の社會である、忠と云ひ孝と云ひ仁と云ひ愛と云ひ正と云ひ義と云ふ皆社會に奉仕する行爲である、而して此社會に奉仕するには社會の何物たるやが明瞭に了解されねばならぬのである、從來女子は境遇上血族的社會の關係、卽ち家庭の外には餘り係さわつて居なかつた爲め一般社會に就ては甚だ知るところが少なかつたのである、しかし一

般社會の關係が分らなければ血族的社會の關係も明瞭には解せ得ないのである、子に對しては親であるが社會に於ては其一員として仕事をして居る、子が親を我親としてのみ知つて其他の關係を知らなければ所詮十分に親を了解することが出來ないのである。隣保相憐むと云ふことがある、しかし社會の狀態を辨へずして只だ之れを憐む時は却て其隣を害することがある、故に社會を知らなければ眞の奉仕をなすことが出來ないのである。

社會を了解して之れに奉仕するのは宇宙又は全體に奉仕するのである、社會と云ひ個人と云ひ皆宇宙の法則に支配されて居るのである、全體の力に支配されて居るのである、此法則此力を知りて始めて人生の意義も明らかに了解せられ、道德の大本も確立さるゝことが出來るのである、社會の進化はダーヴインの說かざる以前より存在して居つたのである、社會進化の理法に從へば社會に新舊思想の存在するは、敢て怪しむに足らないのである、彼の姑と嫁との衝突は新舊思想の然らしむるところでまことに止むを得ないことであると、辯解するものあれども、其思想の相違は始めより分り切つたことである、苟もそれが分つて居る以上は互に其相違に同情を有つことが出來、從つて衝突を見るに及ばないのである、社會進化の眞相を了解したならば此忌はしき不和も除き去ることが出來るのである、宇宙を知るとか全體を知るとか云ふことは結局眞理に到達し凡ての關係を實相を知ることである。

以上自己と社會と宇宙との關係を開悟することが出來たならば、こゝに始めて根本的道德の生命が活動して來るのである、しかしながら、かくの如き修養は實際社會の活動に接觸して圓熟渾成して來るので、學校時代の教育にて完成するものではない、又精神の一張一弛により或は盛んになり或は衰へることもある、されば生涯努力して修養を怠たつてはならぬのである。

さて其修養の方法は如何。精神的生命の糧は何によりて與ふることが出來るのであらうか。先づ第一に東西の聖典である、孔、孟、釋迦、耶蘇を始め聖者、哲人の人格、經驗教訓に接することである、第二には修養團體である、或

は宗教の教會や修養を目的とせる婦人會等の如き機關である、第三には自らの活動を營むことである、運動は身體健康の增進に缺くべからざる如く、精神的生命も亦其活動によりて發達するのである、慈善、救濟、風俗改良、社會教育等の事業に働くのである、此の如くして精神的生活を營むことが出來たならば、獨り女子としての本分を全ふすることを得るのみならず、國民としては國家の進歩に貢献し、人としては人類の福祉に寄與することが出來て、始めて人と生れた甲斐があるのである。

第八章　結　論

以上各章に述べたるところは理想的に過ぎずやと疑はるゝも知れぬ、或は女子自ら其發展の如何に困難であるかと思ひて躊躇するものがあるかも知れぬ、然れども教育は時代の要求に應ずべき智識、實力、品性を涵養するを要すると共に、一歩を進めて將來の趨勢を察し其進歩發達を促がすところのものでなければならぬ、況して我國の現狀は所謂百事過渡の時代に屬し、大勢の歸着するところを解せず、空しく方向に迷ふものあり、殊に女子の境遇は最も新舊思想渾沌の時代であつて、此境涯を脱出せんが爲めには堪へ難き苦悶がある、忍び難き束縛もある、けれども一度其使命のあるところを自覺し、煩悶と戰ひ束縛と闘ひ向上發展の途に上ることが出來たならば、其苦戰奮闘は却つて云ふべからざる趣味を感じ、禁じ難き悦樂を覺えて、進みても、進みても止むことの出來ない精神を自得することは多くの實例の證明するところである。而して若し眞に其天分を知り使命を悟ることが出來たならば、現に國民が上下を擧げて其運命を開拓せんが爲めに、若心焦慮を重ねつゝある狀態を傍看すべき時ではないのである、現代の社會に於て然るのみならず、第二の國民をして吾人の遺したる國家の運命を開拓して更に之れを發展擴大せしむることは繫り

て母としての女子の責務である、我々は切に女子が其使命を悟りて之れを全ふせんが爲に發奮努力せんことを希望して止まざるのである。

（「婦人文庫」教育の巻）明治四十二年十月出版